目次

詔書と日蓮主義……本多日生
工場教化に就て……本多日生
社會部より……武田顯龍
記事報道……

第廿七年十二月號

詔書

朕惟フニ國家興隆ノ本ハ國民精神ノ剛健ニ在リ之ヲ涵養シ之ヲ振作シテ以テ國本ヲ固クセサルヘカラス是ヲ以テ先帝意ヲ教育ニ留メサセラレ國體ニ基ツキ淵源ニ遡リ皇祖皇宗ノ遺訓ヲ掲ケテ其ノ大綱ヲ照示シタマヒ後又臣民ニ詔シテ忠實勤儉ヲ勸メ信義ノ訓ヲ申ネテ荒怠ノ誡ヲ垂レタマヘリ是レ皆道德ヲ尊重シテ國民精神ヲ涵養振作スル所以ノ洪謨ニ非サルナシ爾來趨向一定シテ效果大ニ著レ以テ國家ノ興隆ヲ致セリ朕卽位以來夙夜兢々トシテ常ニ紹述ヲ思ヒシニ俄ニ災變ニ遭ヒテ憂悚交々至レリ

輓近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レトモ浮華放縱ノ習漸ク兆シ輕佻詭激ノ風モ亦生ス今ニ及ヒテ時弊ヲ革メスムハ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル況ンヤ今次ノ災禍甚タ大ニシテ文化ノ紹復國力ノ振興ハ皆國民ノ精神ニ待ツヲヤ是レ實ニ上下協戮振作更張ノ時ナリ振作更張ノ道ハ他ナシ先帝ノ聖訓ニ恪遵シテ其ノ實效ヲ擧クルニアルノミ宜ク教育ノ淵源ヲ崇ヒテ智德ノ竝進ヲ努メ綱紀ヲ肅正シ風俗ヲ匡勵シ浮華放縱ヲ斥ケテ質實剛健ニ趨キ輕佻詭激ヲ矯メテ醇厚中正ニ歸シ人倫ヲ明ニ

シテ親和ヲ致シ公德ヲ守リテ秩序ヲ保チ責任ヲ重シ節制ヲ尙ヒ忠孝義勇ノ美ヲ揚ケ博愛共存ノ誼ヲ篤クシ入リテハ恭謙勤敏業ニ服シ產ヲ治メ出テテハ一己ノ利害ニ偏セスシテ力ヲ公益世務ニ竭シ以テ國家ノ興隆ト民族ノ安榮社會ノ福祉トヲ圖ルヘシ朕ハ臣民ノ協翼ニ賴リテ彌々國本ヲ固クシ以テ大業ヲ恢弘セムコトヲ冀フ爾臣民夫レ之ヲ勉メヨ

御名御璽

攝政名

大正十二年十一月十日

內閣總理大臣

各省大臣

詔書と日蓮主義

一、緒言——二、詔書の大旨——三、詔書の骨子——四、日蓮主義との關係

本多日生

一、緒言

本月十日を以て御發布相成りました、國民精神振興に關する詔書と、日蓮主義との關係に就て御話致します。この詔書の御聖旨は、誠に畏多い次第でありまして、陛下が聖慮を煩して居らるゝことがありありと現れて居ります、大慘害に當つて我が國民が、精神の頽廢と思想の惡化とを改めねば、我國の前途はどうなるであらふかと御心痛遊ばされて、御發布相成りし事と思ふ、大御心を煩はせし國民の罪は眞に恐懼に堪へぬ次第であります。建武の昔、楠正成が後醍醐天皇に召されて、北條の惡逆を膺懲すべき大命を拜せし時、正成は直接に陛下の御言葉を賜りし光榮に感激しまして、即座に奉答しました、如何に賊軍多勢なりとも、必ず之を打破つて、聖慮を安んじ奉らんと御請けしまして、建武中興の大業を成し遂げ、僅か八百人の小勢を以て、純忠至誠、能く賊軍討伐の大業を成就したのでありますが、我々國民も楠正成が、陛下の大命に感激しましたその精神を以て我國を泰山の安きに置き、國家の隆運

を圖るのが、今回の詔書に奉答する所以であらうと思ふのであります。

二、詔書の大旨

今回の詔書の御趣旨は、國家興隆の本は國民精神の剛健質實にあるから、速かに一同が健全なる國民精神に立ち返らねばならない、國民精神とは其國の歴史的に發達したる美しき國民共通の精神であるが、我國では祖先以來三千年間養いし精神を、益々養い、之を昂り立てることが、我國を盛んにする本である。明治大帝は、意を教育に用ひさせ給ふて、教育勅語を下したまふた、此の勅語には中心を國体の尊嚴に置き、而して特に忠孝の道德を重んずることを示されたのである。又戊申詔書には忠實勤儉の德を擧げ、更に維れ信、維れ義の德を擧げて居られる、此の教育勅語と戊申詔書とは、何れも道德を重んじ、國民精神を盛にする御趣意である。國家の興隆には、法制經濟、軍備等が必要であるけれども、殊に國民精神即ち道德の大切である事を示されたのであるが、此の御示しの爲に民心が一定し、其の効果が現れて今日まで我國は榮えたのである。　陛下は先帝の御趣旨を請け繼がれたのであつたが、今度突發した關東の大慘害に就て、誠に大御心を痛めさせ給ふたのである。今度の災害は天災ではあるが、其の中に民心の欠陥があつて、被害を大ならしめて居る。或は天の怒かも知れない。不可抗力でありとすれば止を得ないが、人心の頽廢から、被害が大きかつたことが、一層　陛下に御心痛を相かけたことゝ思ふ。學問が道德と離れ、信仰と離れ、知識の方面にのみ偏傾して、爲に浮華放縱の習い漸く兆し、人心の頽廢となり、又一方には思想が惡化して、輕佻詭激に流れ、遂に其の中から極端なる思想を生ずるに至つた、斯樣なる思想の惡化、人心の頽廢を今日に於て改めねば、我國の前途は危ないのである。況して今度の災禍は極めて大きいから、文化の恢復と國力の振興、二つながら國民の精神に俟たなければならない、其の精神が腐敗し、惡化して居つては、如何にして國家の興隆を期することが出來ようか、今日は上下を通じ、心を合せて國家を經營すべき時である。力を協せて國家のために盡すには共同一致の精神を盛ならしむることが大切である。故に教育勅語と戊申詔書の御趣旨を守り、教化の實効を擧ぐべきである。教育の淵源、國體の精華たる忠孝道德を發揮して行かねばならない、綱紀を肅正し、浮華放縱を排して、素實剛健ならしめ、又人倫を明にして、同胞相親和する美しき道德を大切にし、世の中の爲に盡す道を明にして、社會の秩序を重んじ、博愛共存の義を明にせんければならない、家の中に在つては、己を慎み、又業務を大切にし、而して財産を增す樣に考へ、世間に出でては、世のため人の爲め、道德を重んじ、現今の風潮を變して、國民的道德を盛ならしむる樣にして、我國家を擁護し、大和民族の安寧と、社會の福祉とを增進し、斯くして國民精神を發揚し、建國以來の大業、即ち天職を果す樣、臣民の自覺を促し給ふたのであります。

三、詔書の骨子

以上は詔書の大意を申述べたのである。それは全體の御趣旨を忘れてはならぬ事故申したのでありますが、更に大事な點を稽へ、而して日蓮主義を奉す

る者との關係に及ぼうと思ふ。此の詔書の骨子は、國民一同が傾向を一變しなければ日本が亡びるぞと仰せられたので、人心の頽廢と思想の惡化とを匡正する必要がある。國民は聖旨を奉戴して、今日限り精神を入れ換へ、社會の風潮を一變する樣力を盡さねばならない、況して日蓮上人の敎化を戴く者は、殊更に　陛下の聖旨に感激して、一段と國家の爲に力を盡すべきである。昨年は立正大師の諡號を賜はり、今年又詔書を拜せし我々は、大いに感憤すべきことであると思ふ。詔書の大事な點は、道德を尊重して、國民精神を振作すること、即ち道德的反省を促されたのであるが、然らば國民精神とは何ぞ、又如何にせばこの國民精神を涵養し得べきかと云ふに、我が建國以來三千年の長きに亘つて　我々祖先の養い來つた美風の結晶が國民精神である。他國民にも其の國民としての美點はあらうが、我々日本人には日本人としての美點がある、其は其の國の一切の事情が綜合して養はれるのであつて、地理の關係、氣候の關係、風景の關係、民族の根本性質、國體の異同、德敎の感化、思想力、歷史的の感化、之れ等が國民精神を涵養し來つたのである。地理的には四面海を環らし、恰も英國が四面海であつて、大發展を成し、太陽が領土から沒する時がないと云ふが如く、我が日本は之に類するので、これ天より賜りたる日本の特典である。氣候は寒からず暑からず、風光明媚にして人目を悅ばしむる、それが國民精神に影響する。又天孫民族は性質優秀であり、又偉人が傑出し、國體は萬國無比であり、敎は惟神道、佛敎、聖賢の敎の三敎を融合し、宗敎的情操、道德的情操が美はしく發達を遂げ、其れが歷史の上に現れては、

千數百年前より、聖德太子あつて文化を開拓し、宗敎家としては傳敎、弘法、日蓮、軍人としては楠正成の如きが續出しまして國民を薰化し、三千年來國家の統一を破らずして美點を維持し來つて居る。形に象徵すれば富士の山の如く、世界に山と云ふ山は多けれ共、富士の如く崔大莊嚴なるはなく、又花を以て譬ふれば、吉野の山の櫻の如く、國民は櫻花の如き美しき精神を持つて居る。又四圍洋々たる清き水を以て取圍んで居る故に、國民精神は澄んで居るのであります。故に藤田東湖の正氣の歌に「天地正大の氣粹然として神州に鍾る、秀ては富士の嶽となり、發しては萬朶の櫻となり、凝つては百錬の鐵となり、注いでは洋々の水となる」と云へるが如く、我々國民は祖先以來磨き傳へし、美しき國民精神を持つて居る事を自覺し、そこに一種の誇りを持つて居らねばならない。泰西文化を嫌ふ譯ではないが、特色を特色とする自信力は國民精神を維持する最大の要件である、此の誇りを忘れて、外國の思想を偏重する者は亡國の民である。譬へば牛が角を捨て、馬が足を切られ、鷲が嘴を捨てたのと同じであつて、日本人がその長所を切り取り、他に憧がれることと同樣である。近頃は人心惡化の結果三千年來養い來つた良風美俗を捨てゝ、外來の風習に憧れて居るのであるが、そは亡國の風潮である。而して其處に、新しい、古いと云ふ言葉が流行して、我國の歷史的美點を呪ふ者あるに至つた。この詔書には「國家興隆の本は國民精神の剛健にあり、之を涵養し、之を振作して、以て國本を固くせざるべからず」と、御示しになつて居るのであります。

四、日蓮主義との關係

日蓮主義は最も國民精神の剛健を期する所の教である。日蓮上人は一般宗教家と異り、我が國家存立の意義を讃美せられて居るので、そのことは、御遺文に歴然として現れて居る「我國は月氏震丹一閻浮提にも勝れ、八萬の國にも超えたる國ぞかし」と仰せになつて、實に日本程立派なる國はないと云ふ信念を持つて居られた。日蓮の名を冠する事は「明なる事日月にしかんや、清きこと蓮華に及ぶべしや」と仰せになり、日は智、蓮は德を象徴せしものにして、清澄山頭旭ヶ森に於て、南無妙法蓮華經と唱へし時、既に世界の光の本は我が日本なりとの信念を抱かれたのである。日蓮上人が旭ヶ森に於て題目を唱へ、そうして日は東より出でゝ西を照す、日本の文化は全世界の光なり、即ち日本並に一閻浮提を照すと喝破せられたのは、眞に徹底して我國の使命を明にせられたものであります。我國の長所を長所として世界に屈從せず、或は「八萬の國にも超へ」と云ひ、或は「日は東より出でゝ西を照す」と云ふは、上人の大確信であつた、これ實に國民精神剛健の好典型ではないか。又「日蓮生を此の土に得たり、豈我國を思はざらんや」「法を知り國を思ふの志」「一身の安堵を思はゞ先づ四表の靜謐を祈るべし」と絶叫せられた、此の精神は、國民精神剛健の發露であります。故に日蓮上人の主張は、國家を閑却するが如き教化は斷じて採用してはならない、「彼の國によかりし法なればとて此國にもよかるべしとは思ふべからず」と喝破して、明かに國家本意の解決を與へ、以て國民精神の重きを教へたまふたので

ある。

斯くの如く國家本意の思想を以て教法までを解決せられし上人の明斷は、果して何れより來るかと云ふに、是れ全く我國の國體の然らしむる所であります。我が國體の卓越せる所以は一種言ふべからざる微妙の意義を有するのであつて、即ち崇高なる神秘を藏するのである。神秘は人によりて或は信奉せざることもあるが、我が國民が我が國體に關する神秘に對しては、決して一ノも之を疑ふ者なくして傳へ來つたので、其處に國民精神の淵源が存するのである。その國體に關する神秘とは何ぞ、他なし天地正大の氣粹然として神洲に鍾まると云ふ點である。この天地正大の氣を形に象徴すれば、富士の嶽と成り、洋々の水と成り、精錬の鐵と成り、萬朶の櫻と成るのであるが、これを人格に象徴すれば國祖の神樣と成り、萬世一系の皇基を開きたまふたのである。故に萬古天皇を戴くことは、天地正大の氣よりゆり、之を翼贊する國民精神も亦天地正大の氣の結晶に外ならない。この神秘的説明は我等大和民族傳來の精神にして、決して之を動搖せしめてはならぬ。この國體觀に基いて忠孝の道德は發現し來つたのである。故に國民は一齊に皇室中心の思想を大本とし、家庭に在りては家長制度を馴致し、決して泰西の個人主義的道德を本としないのである。

この國體とその精華とに就ては、我が日蓮主義は先覺者を以て任じ、指導者を以て任じて居る者である。忠の道德に於ては北條氏と戰ひ、孝の道德に於ては母を蘇生せしめし、立正大師の傳記を一見すれば、何人も大師が國民精神の指導者たることを否むことは出來まい。

又戊申詔書の「忠實業に服し、勤儉產を治め」と仰せられしに就ては、我が國民は業務を撰むに當りての熱誠を缺き、隨つて各自の業務に忠實ならず、且つ勤勉努力の美風を失ふて居るが、そはこの際大いに覺醒を要する點であるが、我が日蓮主義は各自の業務を通じて國運に貢獻する大覺悟を促す、頗る忠實勤勉の敎である。立正大師は「徒らに遊蕩雜談して明し暮さんは盜人なり畜生なり」とまで警告せられ、精勵刻苦事に當りて撓まざる頗る剛健努力の典型であります。

又我が國民精神を涵養するには、思想文化の敎化を盛にし、而してその敎化は歷史的の德敎を尊重することを第一義とせねばならぬ。即ち我が國に於ては神儒佛の三敎の長所を兼備して之を活用するより外に途はないのである。三敎を併せて閑却するの誤まりなるは論なく、縱し三敎の何れかを用ふるとも三敎兼用の妙を會得せざるものは斷じて我が國民精神を公正に指導し得べきでない。故にこの間の妙用を熟慮するを最先の要義とす。この要義を會得せざる人をして敎化に當らしむれば、思想精神は愈々混亂に陷り、決して健全なる發達を期することは出來ない。この重大なる着想を鮮明にせざるは我國文敎の一大缺陷であります。東洋文化振興會が起り、又この度の詔書を拜受しても、この一點が明瞭に解決せられざる以上は、我が國民精神の復活涵養は意の如くならないであらう。眞に國家の前途を思ふ志士仁人はこの一途に對して明晰に判斷せんことを切望して止まないのである。

然るに我が日蓮主義はこの間の大事に對して、頗る理想的なる敎化を布くものであつて、眞に國民精神を涵養する敎化の効用に於て、第一の模範者と謂ふも斷じて過言ではない、必ずや今後この大事を會得する志士仁人の出でゝ、遂に我國の前途を救ふに至るならんと信ずるのであります。

この意義に於てこの度の詔書は確かに國民精神復活の大詔であり、續いて三敎興立の春を迎へ、且つ我が立正大師の敎化の、廣宣流布する曙光はこゝに現はれたのである。立正大師は災害を眺めて正法興隆の前兆なりと喝破せられしが、今回の大慘害も必ずや大法光耀國家興隆の先驅となるであらう。

（完）

福音

大僧正本多日生猊下著

大慘害に當面せる國民の覺悟

一部定價金五錢（郵稅金二錢）

百部割引金三圓五十錢（稅共）

大正十二年九月一日の關東大震災は啻に獨り關東の被害に止まらず波動は及んで我が邦の大震災となり、帝國々民發展の首途を疎害しその省顧と所作に迷妄せしめた。當に國難にあらずして何んぞ。

この國難の秋、阿修羅の巷に一大音聲となり一大光明となつて吾人の進む可き道を敎へ爲す可きを示したのは何んであつたらうか。夫は本書である。

本書の出版は忽ち國民渴仰の的となり心あるものを隨喜せしめた。

然るに、今、本書も殘部尠し、速刻この書を得て座友の銘とし、將來の指針とせられよ。

發行所　名古屋市東區田代町城山常樂寺內　統一編輯局　（電東五四八七番）

工場教化に就て

本多日生

（大正十二年七月自慶會研究會に於て）

一、緒言――二、教化の必要――三、教化の主義――四、政策の確立――五、講師の自警――
六、講師の養成――七、經營者の自覺――八、教化の普及――九、教化の效果――一〇、結論

一、緒言

今日は『工場教化に就て』といふ講題の下に卑見を申述べて、諸君の御批判を仰ぎたいと思ふのであります。私は工場教化に關して特に研究を積んだといふことはありませぬが、永らく工場の教化に當つて居る者であります。實際に教化をしつゝ各工場に就てお話をして來たのでありました、今尙ほ繼續して居ります。その永い間の自己の經驗と、多少教化に關して胸に浮んだやうな事柄を申上げて、諸君の御批判を受けたいと思ふのであります。能く組み立てをしてお話を致したいと考へて居りましたが、非常に多忙でありまして、思ふやうに組織立てることが出來ませぬ、唯だ簡單な順序だけを漸く書いて參つたのであります。若しも私がお話する事に就て御意見がありますれば、遠慮なく御批判を願ひたいと思ひます。

最初緒言として簡單に申して置きたいことは、それはこの自慶會の趣意書にあります通り、「水能く船を浮べ又能く之を覆す」といふ點であります。これは唐の大宗皇帝が「貞觀政要」の中に引いて話して居ることで、國家は國民に依つて成立つが、又國民に依つて壞はされるものだとの警句でありますが、それを轉用して、工業が今日では國家の盛衰に大關係がある、工業狀態が健全であればその國は發達をする、船は能く水に浮ぶ、工業狀態が不健全であれば國家は衰亡を免がれない、水能く船を覆す。即ちこの言葉の中には工業を重んずる思想と、工業に對して警戒すべき思想の二つがある。それからこれを更に切離して資本家として考へれば、資本の大切なる點と、資本家に對する警戒しなければならぬ點とが出て來る、勞働者に就て言へば、勞働者の大切なる點と、勞働者に對して警戒しなければならぬ點とがある。それが皆この「水能く船を浮べ又能く之を覆す」といふ簡單な言葉の中に含まれて居ると思ふ。その意味合を骨子として自慶會なるものは働いて居るのであるからして、勞働者に就て言へば勞働の價値を認むると同時に、勞働運動に對する警戒を怠つてはならぬといふ、この二面が始終働いて居るのである。それが自慶會の精神のやうに私は考へて居る。

そこで勞働問題は非常な大切なことになつて居ると思ふ。吾々がもう古い時代に聽いたことがあるが國家の重大問題は國防問題と勞働問題と婦人問題とである。この三つがうまく行かなかつたら其の國は存立をし得ないといふことを聽いたことがある。國防問題の大切なることは今も變りはありませぬが、これは大體國民に於て了解して居ることだと思ふ。女性問題は重大な意義があるにもせよ、現在日本の國に於てはまだ〳〵幼稚な狀態で、他年またこれが

重大な意義には移らうけれども、今のところでは未ださう差迫つて居らぬ。獨り勞働問題のみは今日活き〳〵した問題として、或る場合に於ては國防問題よりも女性問題よりも、非常な重大な關係を國家に及ぼして居る。殊に私は今日が非常な大事な時だと思ふ。勞働者各個に就て言へば、健全な傾向にある者が大多數ではあるけれども、併し或る煽動家に依つて勞働運動が惡化しつゝある傾向も看過がすことは出來ない有樣にあるのである、それ故非常に私は重大な秋だと思ふ。

さうして之を解決するには、無論政治的解決、經濟的解決、社會的解決、いろ〳〵方法がありませう夫はみな無論必要であるけれども、私の信ずる限りに於てはそれは第二義の解決である。多くの人が第一義として考へて居る所の政治的解決、經濟的解決社會的解決の如きはこれは第二義のものである、これは私一個の意見であつて、多くの人と見解が違ふ點である。勞働問題を根本的に理想的に解決し、これを善導して健全な狀態に導いて行くには、どうしても教化に俟たなければならない。教化とは他の言葉を以て言へば精神主義に依つて行かなければならぬ。經濟的或は政治的、社會的といふことは廣い言葉のやうであるけれども、これは物質以下に考へて居るのである。經濟問題であるとか生活問題であるとか人間の幸福といふやうな事でも、たゞ物質的にのみ論議されて居るけれども、この問題を理想的に解決し善導して行く根本は單り教化に俟つより仕方がないのであるからして、工場教化なるものが、これが刻下の大事な勞働問題を解決するに就ての唯一のものである、最も大事なものである。教化が不必

要といふ人はなからうけれども、その必要の認識程度が不徹底である事を自分は深く慨嘆する、その意味合に於て今日は卑見を申上げて諸君の御批評を受けたいと思ふのであります。即ち勞働問題の重大なる事の認識と、それを如何にせば可なるかといふ解決案の其處に、工場教化が絶對的に價値を持つ事を申上げて、諸君の御批判を受たい考へであります。

二、教化の必要

次に教化の必要に關して述べて見たいと思ふのであります。工場に於ては教化が無くてはならない。政治的解決をしようとするやうな人は、教化などは手緩いことである、迂愚なことである、最早や勞働問題はそんな道德的或は精神的、教化的の方法に依つて目的を達成すべきものではない、これは權利利益の爲えて居る問題であつて、經濟的、法律的に解釋して進むよりほか無い。斯ういふ觀念が非常に強い。世界を擧げてサウ云ふ考へに居るやうに見えるけれども、私はそれを大誤解だと考へて居るのである。それはどうして誤解と言ふかといへば、政治的に如何に工場法を改正したり、或は過般この會合にもあつたが、協調會の人達が「立憲的工場組織」といふことを言はれる、立憲的といふのは資本家と勞働者とが五分々々の權利を有つて、サウして其の經營者・役員を造るのでも勞働者の意見を聽いて、專務取締役でもその他すべて會社の役員は、今は資本家側からそれを決めて居るけれども、今後は勞働者と資本家との代表者が寄つて、サウして之を決める、それ故に役員は勞働者の以下に働くといふやうな意味になつて行くのである、詰り工場の管理を資本家

と勞働者の協力に依つてやるのが立憲的だといふやうなことで、それが先づ最も理想的な解決の方法である、時間の問題はあるけれども往いてそこに進むのであるといふことを力說せられた。それも或る意味から言へば公正な議論のやうであるけれども、假にそれが行はれても私は決して安全な結果に至らんと思ふのである。それは何を以てかといへば、サウ云ふ委員を選出するといふ時分になつたならば、やはり自分に都合の好い委員を選擧しようとするものである、その事は今の政黨關係を見れば能く判る、今の所謂立憲的政治といふものが、これが私共から觀ては左程に理想的に考へられない、已むを得んからやつて居るけれども、その選擧をするに就ても盛んに買收が行はれる、又干涉が行はれる、又當選したる議員に就ても、その引ッ張り合が行はれる、あらゆる惡辣なる手段がその間に行はれるのであるから、工場に於てもこれが双方から委員を出す事になつて、資本家から五人、勞働者から五人の委員を出さうとするならば、その買收、引つ張り合、あらゆる手段が行はれて、決して平和といふものは容易に得られるものでない事は、今の政友會と憲政會が飽く迄も黨利を挿んで爭ふのと同じものだらうと思ふ。それは或る擅斷的にやつて居るよりは理想的といふ事が言へるけれども、左樣なる爭ひを繼續して居ることがそれが理想的なる解決とは吾々は認めることは出來ないのである。さういふ事がすべて惡いとは言はぬが、それは第二義の手段である。さういふ事もやるが宜からうけれども、それをやるから敎化は要らぬものだ、道德的、精神的敎化ナンといふものは不必要だといふ言葉を挿んでサウ云ふ事を論議して居る者は、吾輩は甚だ間違つた意見だと思ふ。サウ云ふ誤謬が世の中を遂に今日の樣な混濁に導いたものだと私は痛感して居る、そこが違ふのである。

それであるからして敎化の必要に關して、その價値を徹底的に理解することが大事ナンである。これは單に工場敎化の問題ばかりではない、廣く文化全體に亘つて言へば、歐米に於てもこの敎化を侮つてやはり法治國である、經濟本位であるといふことで文化を進めようとした、所謂唯物的傾向が强かつた爲めに、國際間にも極度の競爭が起り、階級間の爭ひも極度に立至つたのである。斯く迄その双方の間が極度に爭ふ狀態になつては、如何なる法律を作つても如何なる經濟政策を執つてもこれは安定すべきものではない。現に安定して居らぬ、現在安定しないといふことの證據は、モウ世界を擧げて一々證明することが出來る、毎日の新聞の報道はみなサウである。それではこれが何處まで行つたら安定するかと言へば、安定はしない、即ちこの戰亂、この爭鬪を續けるに過ぎないものである。

サウすると左樣な風にこの敎化を輕んじて——敎化の中に在るものは精神的、道德的、宗敎的なるこの人間の高潔なる精神であるが、サウいふものを輕んじて、唯だ利害の關係から之を經濟的、法律的に按排して行つてうまく行くといふ考は、根本に間違つて居るのではないか。それは文化全體がサウである、所謂唯物主義の文化はモウ行詰りになつてしまつて居る、如何に藥搔てもこれはモウ決して理想的解決に進むことは出來ない。國家の經營に就いて考へても、これは他國を引く迄もない、日本の明治以來今日に至るまで五十餘年のこの經驗で澤山だ。こ

れが明治の初年からやはり精神主義を輕んじた、全廢はしないけれども輕んじて、歐米の法治本位、經濟本位の思想に流れて行つて、道德や宗教は表面あるやうだけれども之を侮辱し、これはモウ健全派、不健全派を問はない、先つ言はゞすべて國民の全體がサウ云ふ傾向を執つた。その執つた結果はどうかといへば、人心の頽廢と思想の動搖を持ち來つて今日に至つて居る。之を政治界に見た所が政治界の軋轢、政治界の腐敗といふものは殆んど今日は收拾すべからざるに至つて居る。經濟界の狀態でも隨分惡辣な手段が行はれる、會社を作ると言つて株券を募つて置いてそれを潰してしまつたり、隨分商業關係に於ても私は不道德的なことが澤山行はれて居ると思ふ。工業狀態に於ても今日は決して健全とは言へない、勞働者の方も安定を得て居らぬが、資本家も安定を得て居らぬ、國家から觀ても日本の工業狀態は安定したとは言へまい、非常な不安な狀態になつて居る。これは國家の經營に就ても、教化を本位にしなければならぬ、それに政治や經濟や社會政策が附隨して行くべきもので、教化を第一義の中心に置いて、國家の經綸をやるべきものである。隨つて工場に就ても同じ關係を生じて來るので、工場は營利的なものである、或は法律關係のものであるといふことで、資本家も勞働者も經營者もその頭腦でかゝつて居る限りは、この病は救はれない。どうしても資本家も自ら道德的に眼覺めなければならない、百の理窟をいふよりも彼等の人格を向上することが工場をして平和に歸せしめる根本方法である。資本家が人格的になり、勞働者が人格的になり、經營者が人格的になることに於て、そこに第二義の經濟的政治的のやうな話や、委員制度は行はれて行くけれども、その委員制度萬能といふことの頭腦は抑々間違つて居る、教化を第一にして、それ等は附隨した便宜的なものである、それは其の時々の都合で、一旦決めたからと言つても亦やはり變へなければならぬものである、サウ萬全な法律といふものも、又賃銀制度も經濟の分配もあるものではない、商業の狀況に依り工業の狀況に依つて、始終それは協議して進まなければならぬ。サウいふ不安定なるものゝ根抵を縫ふところの精神が、相互に唯だ利慾一點張になつてしまふやうなことであつたならば、百の方法を講じても結局それは失敗に終るものである。

さういふ譯であるからどうしても工場の教化は、これは人間である以上は缺くべからざるものである、これは工場に限らない、社會教化の問題から言へば社會は一日も教化なかる可からざるものである。人間すべて、之を大にして言へば一國の政治家と雖も一國の君主と雖も、如何なる大學者と雖も大僧正と雖も、この教化を侮辱するやうな者が出た時に於ては、サウいふ者は駄目な者である。人間の社會は古今となく東西となく、如何に世は變遷すると雖も、教化を第一に置いて進むことを徹底的に自覺せんければ救はれない、斯う私は思ふ。釋迦が出でても基督が出でても、孔子が出でても又聖德太子が出られても、達人出づれば我が言に與するものなりと自分は信じて居る。これは何も私が言ひ居る事ではない古い時代からの文化で明かである、論語の序文を讀んでもサウ書いてある、我が建國の事情を調べても皆サウなつて居る、教育勅語を味はつてもやはりその意味に歸するだらうと思ふ、それは非常に古くし

て面も新しい問題である。けれども事實實際その事に當つて居る政治家、經濟家、工場の經營者、勞働者といふものは、皆時代の潮流に押流されて、政治的經濟的に於て一切の解決を取らうとするものである、サウいふ傾向が强過ぎて居ると私は思ふ。

そこで然らば之を如何にするか。資本家も工場敎化といふ事には關係がありますけれども、今日は話を制限して先づ勞働者本位で工場敎化の事を論じて見たい、本當は工場の眞の敎化はその經營者も集めなければならぬ、資本家も集めなければならぬ、勞働講話ではない、工場敎化といふものは資本家を敎化しなければならぬ、經營者も敎化しなければならぬ、だから私は社員のみ集めてお話することも度々ある、又資本家のお集りを願つてお話して見たいと思ふやうなこともこれ迄度々經驗した。實はこの自慶會の研究會の如きも、資本側の人を主にお出でを願ふ考へで居るので、斯ういふ風に無遠慮なことを申上げて「敎化する」といふやうなことを言つては「そんな事を聽くものか」といふことになるから、マア研究とはいふけれども、自分の腹では敎化し得るならば敎化しようといふ考は有つて居る。それは決して勞働者のみの心得が善くなつて工場がうまく行く譯でない。ことは無論の事ですけれども、併し今大事な問題は勞働者本位のことでありますから、今日は勞働者に制限してお話をします

その場合に、私が信ずる限りに於ては、勞働者の大多數は健全な思想を持つて居る者である。何を以て之を證據立つるかといへば、私が永らくの實驗に於てモウそれははつきり認識して居るけれども、さういふ自分の經驗だけでは役に立たぬ。長崎造船所に於て先般精密なる勞働者の心理狀態を調査したことがある、殊にその中の宗敎心に就て調査をした、長崎造船所は一萬二千何百人といふ職工が居るのでありますが、之を百分比例にして算へて見ると、宗敎を信じない者は僅かに百分比例の三しかない、九十七人までは皆宗敎を有つて居る、その百人の中の三人といふ者も、宗敎が要らないものだとか、惡いものだとかいふのではない、年の若い者やいろ〳〵の事情があつて自分は宗敎を有つて居らぬといふだけのものである、敎へればみな宗敎に來る人であるかも知れぬ。實に無宗敎といふやうな人は少ない、百人の中に三人といふやうなものはモウ無いやうなものである。全部宗敎心のある者と言つて宜い。さうして佛敎徒がいくらあるかといふに、百分比例の八十七は佛敎である、あとの十が、長崎は天主敎が舊くからあつたので、それが五、それからあとが神道の大本敎や天理敎と基督敎の新敎である、基督敎は一萬一千人の中に五人しかなかつた。これは勿論工場に依つていろ〳〵違ひはありますけれども、併し一萬人の多數の中に就て調査をした其の事は、餘程確かりした參考になるのであつて、その百人の中の九十七人までは宗敎を有つて居るといふことは、その性格が立派なものだといふことがわかるのであります。姉崎博士の調査も大體同樣である、他の勞働者以外で調査して御覽なさい、そんな百人の中九十七人まで宗敎を有つて居るといふやうな結果は到底出ませぬ。中學校の敎師なら敎師に就てやつて御覽なさい、或は之を役人に就てやつて御覽なさい、市役所なら市役所の役人を集めてやつて御覽なさい、勞働者よりはズッと宗敎心に就ては——マアどの位

の比例になるかやつて見ないとわからんけれども、恐らく半分にも追つかんだらうと思ふ。それ故に私共の立場から見れば、勞働者の大多數の心理狀態は宗教に就てもサウであるが、舊來の日本の道德に就ても、健全なる思想に就ても、一番餘計有つて居る者が勞働階級ぢやといふ風に私は考ふるのである、又サウ信ずるのである。中々義理も人情もその中にはあると思ふ、却つて他の方面に於てサウいふ宗教心だの、又傳統的の道德心などを破壞する者が多く現はれて居りはしないか。左樣な善き素質のあるものを之を放棄して置くことに於て、惡い煽動家なり誘惑者のために、段々多數の者が不心得な方に行くといふことがあつたならば、それは即ち教化を怠つた者の責任である。勞働者自身が行くのではなくして、斯樣なる素質のものを能く理解を與へ善導をする所の努力をしない工場經營者なり、國家なり、又宗教家なりの不熱心が即ちさういふ事になるのであると言ひたいのであつて、私は眞面目にサウ信じて居るのであります。

今一つは惡い傾向の方に就ていふのでありますが勞働者には日本勞働總同盟といふものが出來て居る。非常な澤山の勞働團體が聯合して居るのである、それが殆んど勞働者團體の中の一番優勢なものであるかの如き有樣を示して居るが、それが此の間高尾某といふ社會主義者が殺された、あれは戰線同盟とかいふので、直接行動の戰線に立つて居るといふ意味だらうと思ふのですが、その戰線同盟なるものゝ一人が殺された、その葬式に對して日本勞働總同盟の連中が盛んに之を見送つて、勞働團體の旗を樹てゝ葬儀を盛んならしめるやうなことをやつた、あれは警視廳などの干渉があつたからマアあゝいふ事であつたけれども、放任して置いたならばどれだけの騒ぎをしたかわからん位である。その騒ぐ者は社會主義者ばかりではなくして勞働團體である。そこに社會主義の兇暴なる戰線同盟と勞働團體の間には、モウ殆んど兄弟姉妹の關係があるといふのは、これは日本勞働總同盟の底意が餘程普通の勞働運動ではないのである、單に勞働者の賃銀を上げるとか、勞働者の幸福を增すといふやうな事はそんな事は手緩いといふことを明かに彼は言明して居る。私はこの間神戸に於いて總同盟の神戸支部から出して居る所の書面を見た、これはモウ國家の權力を呪ひ、資本階級を呪ひ、軍人を呪ひ、あらゆる側を呪うて、さうして彼等は「勞働獨裁の新社會」を建設せんとするといふのである、勞働者のみに依つて世の中を支配する、勞働獨裁といふのは勞働者が全權を握つて、政治上の事も社會上の事も一切の事を支配する所の勞働獨裁の新社會を建設せんとするものである、その他の事の如きはモウ早や問ふ必要が無い、天下を二分して勞働者と資本家と鬪ふ、その資本家に與する所の政府、軍人、思想家、すべて之を敵として鬪ふ、地方に於ては小作人と地主が喧嘩をする、地主に味方をする巡査でも役人でも國家でも皆之を否定して進まんとする所のものであるといふ事を、彼等は明白に言ふのであります。アゝいふ主張といふものを、これを觀察すべき側に於ては左程えらい事を言うたやうにも思はずに居られる人が多いし、新聞記者なども平氣でさういふ風に言つて居られるけれども、私は社會主義者の葬式に勞働團體が非常に熱心でアゝいふ騒ぎをしたり、又今の勞働獨裁の新

社會を建設せんとするといふやうな事は、私が今まで研究して居る所から觀れば、モウ日本を露西亞と同じものにしやうといふ所の社會主義者の運動そのものが、此の勞働總同盟の主張であつて、何も違つて居るものではないと思ふのである。社會主義者がアヽいふ勞働者の力を使つて社會の破壞をしようとするのである、社會主義の少數者が自分でやらうとは思うて居ない、これが口火になつて勞働者の不平を誘發せしめる、即ち勞働者の不平は火藥である、その火藥に吾々は火をつける所の口火に過ぎないといふのが社會主義者の立場である。その社會主義者の言ふ事と、今の勞働總同盟の人達が言ひ居る事とは、私に於てその相違點を少しも認めることが出來ない、全然同一の運動に從事して居るやうに考へる、そうして勞働運動の際には直ぐに革命歌を歌ふのである、その革命歌の内容は既に諸君御承知のことであらうが「あゝ革命は近づけり、あゝ革命は近づけり、高く掲げん赤色旗」といふので、これは露西亞の革命と同じ意味合を言うて居る。さうして軍人を罵つて「彼れ軍閥を街頭に斬れ」とか「軍人のどてつ腹を蹴り上げてしまへ」といふことをいふので、資本家との鬪ひではない、何故軍人を左樣に嫌ふかといへば、國家の秩序を擁護して居る者が軍人であるから、秩序破壞の場合には資本家などは眼中に無い、蹴飛して行けば宜いのである、その暴力を鎭壓する者が軍人であるから、そこで彼等は第一に軍人を罵るのである、「軍人は資本家の走狗である」といふやうな事を言ふのでありますが、私は軍人は決してさういふ者とは認めない。又今まで日本の軍人が如何に國家に貢獻をし、如何に高潔なる働きをせられたかといふ事は、今少し落ちついて考へて見ればわかる事である。そこが私はどうも此の日本の勞働運動は、少數者ではあるけれどもそれに引摺られて、勞働團體の名に於ていろ〳〵不健全な方へと進みつゝある。本人自身は左程に思うて居ないかも知らんが、「あゝ革命は近づけり」と言つて踊つても大してひどい事をいふ積りではない、脅威し文句ぐらゐに思うて居るか知らんけれども、併し段々引摺られて行く、その引摺る方の人間の決心は戯談事ではない、非常な兇暴な思想を以て日本の社會の秩序を破壞し國家の存立をも危くすべく進む所の運動なりと認識することに於て、私は間違ひないと思ふ。

さうすると斯樣な者が勞働運動の中に混り込んで來て、さうして今言ふ健全なる勞働者を誘惑し煽動して行くといふ事になつたならば、之を防ぐ方法は何處に在るかというと、これは經濟や政治の事ではない、工場法の問題ではない、どうしても健全なる勞働者に正しい理解を明かにし、今まで持つて居る理解を一層鮮明にし、さうして彼等が本來持つて居る立派な宗教心なり愛國心なり、その他の道德的美點を彌が上に之を發揮し、培養して、さうして彼等の煽動誘惑に陷らないやうにして行くといふ事は、餘程大切な事である。これは實に工場だけの問題ではない、所謂國策上の問題であつて國家問題である。私として考へれば、勞働者が如何にして健全になるかといふ事は、工場法の研究に力を入れたり、世界の勞働會議に出す委員を選むのにヤツサモツサやつて居つたり、それも宜いでせうけれども、そんな事の爲めにヤツサモツサせられて、工場の教化を國家事業として何等手を着けられて居らない。又資本家

としても、やつて居られる所もあるやうであるけれども、資本家自身の自覺としてそれが十分に徹底して居るものではない、「やらんよりもマアやつたら宜からうか……」「どうも詰らぬから廢めようか……」といふやうな人が多い、少しも徹底して居らぬ。それは工場の教化は、唯だ工場の經營者の利益を圖る爲めのみにやるのではない、所謂國家の健全なる發達、工業の健全なる發達を期する爲めである。社會の爭亂の場合には何時も勞働者が先き棒になる、各國とも學者の剽輕な奴が先きに飛出してそれがガタ〳〵いふ、實力を以て後から行く者は、勞働者である、第一線に立つ者は即ち剽輕な學者である、それからそれを實行せんとする者が勞働者である。であるから斯の如き健全であるべき多數の勞働者、之れを彼等が誘惑をし煽動をするに委せて置くといふことはあるべきでない。然らば如何にせば之を防禦し擊退し得られるかといへば、唯だ一に工場の教化に於てこの目的を達成し得らるるものであると私は確信する。

茲に於て工場の教化は、決して輕微な問題ではないのである、工場内だけの問題ではない、日本の社會問題であり國家問題である、これは一番大事な問題であると思ふ。

尙ほこの工場教化の必要といふ事は、他の點からも立證されると思ひますけれども、今は二點に止めて置きます。斯樣なる健全なる勞働者が、彼の如き恐るべき兇暴なる思想に誘惑されんとして居る、然るに教化を怠つて放擲して置くといふことは、工場をも思はず、社會をも國家をも思はないものである、實にこれは思慮の足らぬことだと私は考へて居るのである、そこに工場教化の必要を私は力說して進みたいと思ふ。自慶會の存立は即ちそこにあるのである、自慶會が起つたのはさういふ意味であるといふ事は、既に御了解を願つて居ることであります。故に最初は資本階級の人は一人も這入つて居なかつた、後には各工場に行つて講話を始めたから、その緣故上今日は各工場の經營者である人が參加せられて居るけれども、資本家として來られたのではない、會社工場の經營者として、これは結構な事であるといふので御賛同を得たのですが、最初は純然たる宗教家なり學者なり、又陸海軍人の國家社會の安寧秩序を思ふ者のみ寄つて自慶會は創立された、その發起人を見、最初の賛成者の名前を御覽になればその事は洵に明瞭な事である。工場講話は資本家のためでもなければ會社のためでもない、國家社會を憂ふる所の志士仁人の事業として、工場教化は大いに隆盛ならしめなければならぬものであるといふ信念を、私は今も强く持つて居る次第であります。私共が工場講話に行きましても、資本家に頼まれて來たのでやないかといふやうな事をいつて、始めは疑ひを懷いたり罵つたりする者もありますけれども、私が今言ふ立場を明かにして話して行く間には、左樣な疑念も去つて、私の言ふ事に就ては左樣な反抗などは何處にもないやうになつて居ると思ふのである、それは自慶會の主義主張の公正なるがためであると信ずる。それ故にこの二點の問題を骨子として今話を進めて見たいのであります。

第三、教化の主義

然らば左樣に工場教化が必要であるとして、何で

もやつたら宜いかといふとさういふものではないと思ふ、そこに教化に就ての方針といふか、主義といふものを明かにしなければならぬ、尤も工場講話といつても教化といつても範圍が廣いから、衛生に關する所の話とか、或は場内の規律に關する心得とか或は何か新しい規則が出たのを呑込ませる爲めに説明をするとか、或は技術上の知識を教へる爲めに話をするとかいふやうな事も、工場講話とか教化とかいふ事は言へるか知らんけれども、私はさういふ事は切離してお話して見たい。それは其の時〳〵の必要上の話である、暑くなつたからして餘り氷を飲んではいかぬといふやうなことは、工場教化といふ程の問題ではないのである、さういふ事は誰が行つてお話になつても、それが主義といふ程な面倒な事ではありませんが、この勞働者の精神を善導する、彼等の理解を明かにして行くといふ教化に就ては、主義を確立しなければいかない。主義と言つても決して狹い日蓮主義だとか佛教主義だとか、サウ云ふ事まで確立する必要があると申すのではない、大體に於て今私が御參考に主義といふことを申すならば、總ての事を申上げる譯にはいかんけれども、第一は「精神主義」といふことが問題である、これが一番大きなものである。教化に當る者の頭腦までが物質的のものであつたならば、それはどんな立派な役人が、工場監督官が行つて話をしたとか、何處の署長が行つて話をしたとか、何處の金持が行つて話をしたとか、會社の重役だとか言つても、サウいふ自身の頭腦が唯物的になつて居るやうな人は、工場教化は絶對にやつて貰はん方が宜からうと思ふ、サウでなくてさへも唯物的になりたがつて困つて居る。だからして精神主義といふ事を理解せぬやうな者は、無論工場ばかりではない、文化の中から排斥しなければならぬ譯である、それが鬼とも蛇ともなつて世の中を毒するのであるから、吾々の敵は即ちこの精神主義を理解しないところの者である、自慶會は前にいふが如くに大なる精神主義に依つて立つて居る。

そこでこの工場教化の方針は、第一に精神主義でなければならぬ。精神主義とは何かといふと之を別ければ宗教の信仰とか道徳の實行とかいふやうな、人間が精神生活の上に高潔なる理想を有つて活きて行くといふことである、人はパンのみにて活きるものではない、唯だ口を開けば經濟を言ひ、パンを叫び、生活を説くといふやうなことにのみ沒頭して居るやうな者は、工場教化には大禁物である。それがこの今日の病をして斯の如く深からしめ重からしめた所以である。それならば左樣な經濟とか生活といふ事を否定するかといへば、それを否定するといふことのあるべきものではない、人間は活きて居る以上は食はなければならぬ、着なければならぬから、無論生活の安定とか物質の問題といふものは必要な事で、それは誰であつても食はず飲まずに死んでしまへといふやうなことは、狂人でない以上言ふものではない。けれども人間生活の第一義は精神的なるものである、所が今日は能く「衣食足つて禮節を知る」といふやうなことを引張り出して、先づ衣食を豐富ならしめなければ、そんな禮節とか道德といふことを言つても駄目だ、現代は生活が窮迫して居るのであるから、道德や宗教は駄目だ、この腹のペコ〳〵になつて居るのをどうして呉れるんだ、斯ういふ事を健全な側の人も不健全な方も一緒に言ひ居る、

實に恐しい事である。不健全な者が言ふのは、これは意味がある。彼等は哲學や宗教や道德や、そんな事は腹の減る話である、だからそんな事を言つたならば耳を塞いで駆足で通つてしまへといふ事を盛んに說いて居る、それは兇暴なる思想を實現せんとする者の爲めには、宗教や道德や精神生活が第一の敵である、何よりも恐しいのは——軍人よりも法律よりも巡査よりも彼等の一番恐しいものは此の精神主義である、それであるから精神主義を呪ふことが一番猛烈である。然るに健全な側に立つ役人とか、或は教育者とか、社會思想家とか知識階級といふやうな者が、精神主義を忘れるといふことでは、この病を蔓すことは出來ない。例へば國民道德の一つに就て考へても、軍人を今日罵るやうになつて來た、これは人心が頽廢したから起ることなので、「義は山岳より重く死は鴻毛よりも輕し」といふ事が日本の古來の道德である、今の勞働運動のやうに生活權といふやうな事のみが第一義であつたならば、假令國家の爲めにでも命を捨てるといふことは出來ない、命を捨てんならんやうなことになれば吾々は反對だといふことになる、だから義は山岳よりも重く死は鴻毛よりも輕しといふことがわかるまい、それがわからんやうなことでは健全なる國民にはなれんぢやないか。それは國民ばかりではない、それがわからんければ論語も孟子もわからんし、道德といふものは一切わかりはしない、まるで人間が下等の動物と等しい狀態になつてしまふのではなからうかと思はれる。

さういふ思想が盛んに起つて居るのであるから、今日はどうしてもこの精神主義を以て立たなければならぬ、その上に精神主義の道德あり、精神主義の宗教がある。それを人の勞働者が百人比例の九十七人までも宗教を信じて居るといふことは、これは精神主義を捨てゝ居らぬ非常な尊とい證據である、この尊とい所の素質を有つて居る間に之を教化して行かなければならぬ、モウそれが一歩退いて行つたならば教化を受けなくなつてしまふ、「教化などを聽く必要は無い、講話ナンぞ聽くものか、そんな道德の話や宗教の話ナンか腹が減るのみで何の益する所もない、そんなものを聽くものか」といふことで、最早や教化を聽かなくなつてしまふ、すでに講話を排斥する運動も起つて居る。それを同じやうに調子を合せて「尤ぢや〳〵、腹が減つて居る時に講話などしても仕樣がない」といふ樣なことで、役人でも經營者でも皆同じやうにその唯物主義の勞働運動に賛成をするやうな事では、これは到底工場を健全にすることは出來ない。何處までも精神主義でなければならぬ、軍人は無論精神主義である、だから勞働者も精神主義であり、資本家も精神主義であり、役人も精神主義でなければならぬ、精神主義を高唱力說してのみ現代の病弊は救はれるのであるから、先づ工場に於ては何時でも精神主義を標榜して行かなければならぬ、精神生活を第一としなければいかぬ。

それは勞働者の爲めに如何なる法律を作り、どういふ狀態にしても、又勞働者が假りに天下を簒奪することが出來ても、精神に滿足せられん限りに於ては眞の幸福は無い。それは今日の露西亞が好い證據である、露西亞のやうな狀態になつても、露國民の多數が決して物質的の幸福すらも得られない。どうしても人間の慾望には際限が無く、消費するといふこ

とは大勢でやるのであるから、幾らでも消費してしまふ。何處まで行つても、これは自分みづから所謂勤儉力行の人と成らぬ限りに於ては、勤める方を惰けて置いてサウして儉約をしないといふ事になつて慾望を煽つたならば、如何なる國家社會と雖も窮迫の狀態に陷らざるを得ぬのである。之を如何に政治を改善したり、經濟組織を變更したりして見た所が、惰け根性を持つて餘計錢を使ふといふこの風を煽つた時には、世界を擧げてみな窮迫の狀態に陷らざるを得んのである、政治の力、經濟の力で之が救へるものではない。サウいふ人心の頽廢傾向といふものが窮迫を產むのであるから、事そこに至つてはどうすることも出來ない。これは孟子が『其の心に作つて其の事に害あり、其の事に作つて其の政に害あり、聖人また起るとも吾が言を易へず』と言つた、精神が第一變化してしまつて社會事情が變つたならば、どういふ聖人が出て來てどんな事をしようがそれは行くものではない。先づ其の心、その人間の思想傾向を善導せざるに於ては、政治や經濟などといふものは皆第二義以下のものである、家庭で考へても直ぐわかる、親父も了簡が惡い、女房も了簡が惡い、娘も惡い、下女も惡い、皆惡いといふ事になつたならば、どんなに會議を開いて、朝は何時に起きてそれから飯は二杯食つて、或る時には一杯半食つて、誰はどういふ仕事を受持つて……そんな事ばかり幾ら協定して見ても行くものではない。やはり精神的に親父は親父の本分を理解して能く働く、女房は女房で節約をして家を治めて行くといふ風に、道德的の自覺にかへらない限りに於ては、百の箇條書を議決して家中の壁にその箇條書を貼りつけて置いたから

と言つても、到底幸福な家庭は出來ない。友人の間でもサウである、約束書を取りかはして「斯ういふ場合はどう」「ア、いふ場合はどう」といふやうなことを幾ら法律的、經濟的に規定した所が、双方の人間の美しい友情といふものがなかつた時に於ては、その朋友關係は美しく發達するものではない。人間が道德や宗教を離れて、政治や法律や經濟に於てのみ、如何なる社會でも如何なる所でも、それがうまく行くナンと思ふほど暗愚なことはあるまい。

であるから何處までも精神主義でなければならぬ。精神主義は物質を否定するものではない、これは無論の事である、そんな事を言ふ者は誰も無い。唯だ今迄は唯物主義といふものが精神主義を侮辱して進んで來て居るから、それを改めなければならぬと言ふのである。孔子にしてもやはり仁政を行つて成るべく富を公平にするといふ事は政治の本體であると言つて居る、我國に於ても仁德天皇の如く「民の竈は賑はひにけり、民の富めるは朕の富めるなり」と仰せられた、如何なる場合でも人生は多數者の幸福を保全せんとする所に目的があるのである。それは社會主義を俟つて始めていふのではない、何時でも政治の本體はそこにあるけれども、併ながら中々サウ事は思ふやうに行かないのである。

そこで精神主義と同時に國家主義といふ事を確立しなければいかぬ。これが今は個人主義になつて、勞働運動は個人の利益を本位にして居る、それから一方には世界主義を力說して、勞働者は世界的共通であるといふことを以て世界の勞働同盟を作らんとして居る。サウいふ言ひ分をして居るがこれは間違つた事である、勞働者が間違つた考へから世界の勞

働者の共通といふ事を彼等は言うて居るけれども、實際は今日の世界の狀勢は國家組織で進んで居る、勞働組織ではない。露西亞のやうなものが勞働組織でやつて見た所が、やはり國家組織で國際談判に當らんければならぬ、勞働代表といふもので來たつて日本は相手にしやしない、露西亞を代表することに於いて始めてヨッフエといふ者も豫備交渉に當つて居る、勞働者の代表ではない、若しあれが勞働者の代表といふ者であつたならば日本は相手にしない。世界は國家組織である。それ故に露西亞では勞働者が天下を奪つたけれども、國際信義を守らぬ點に於て露國の存立を世界に承認せられない、露西亞の方では早く存立を承認して呉れと言つて氣を揉んで居るけれども、日本は承認しない、世界も承認して居ない。決してあれが成功して居る事ではない、不徹底なる學者は「露西亞の革命は成功の道程にある」なんと言つて居るが、成功の道程にあるといふのは嘘の皮なんで、「失敗歴然」といふことが彼の現狀である。病氣になつて居る者を健康の源ぢやといふやうな事は不徹底な事である。それは或る意味から言へばさうかも知らんけれども、現在は病氣で呻つて居る。露西亞はあのやうな事をした爲めに國家としての力は非常に薄弱になつて、その存立は認められない、借りた金も拂ふことは出來ないやうになつて居る。個人としてもさういふ風に借りた金も拂へない、取引關係もして貰へない、お前の人格を認めないと言はれたならば、これは成功とは言はれない、それは失敗の極度だらう、それでも失敗ではないと言つたならば、失敗といふものは世の中にありはしない、「お前の存在は認めない、お前の人格を相手にして取引は出來ない」と言はれれば、それは失敗の極度ぢや、露西亞は現狀に於ては確かに世界から觀て彼は失敗である。又將來もうまく行くといふことは唯だ單に想像に過ぎない、中々あゝいふ革命をやつた損害を恢復するといふことは、百年にしても戻らぬといふのが社會學者の冷かなる研究の結論である。革命を謳歌するのはとつぴな人間がいふので、西洋には度々革命があつたけれども、革命ぐらゐ損失は無い、これは消極的の仕事である、積極的建設的の仕事は革命によるべきものではない、穩健なる方法で社會を改善すべきものであるといふ事が、即ち社會學上の定論となつて居るやうな譯だらうと思ふ。不平のある者が革命を叫ぶのであるが、さういふやうな事で國家を破壞したり、一時國家の存立を中止したりするやうな事ほど愚な事はない。殊に日本は祖宗三千年の國家を承け繼いで、國を肇むること宏遠に德を樹つること深厚、實に美くしい所の國體を戴いて永くこの國を經營し、近くは明治天皇の御聖德により、陸海軍人の忠勇義烈によつて、此の日本の國は大なる發達を遂げて今日に來たといふことは、國民としてはそれ等の方々に對して感謝感激に堪へない譯である、何の不平を國家に持つべきことがあるか、私は餘りに今日餘所の國の話をその儘受け賣をして國を呪うやうなことを言つたり、軍人を馬鹿にするやうなことを言つたりして居るといふやうなものは、夢を見て居るのではないかと思ふ。

そこでどうしても工場の講話に當る者は、熱烈なる國家本位論者でなければならぬ。これは世界は何處まで行つても國家本位でなかつたならば、左樣な

國家を破壞して社會といふものにしようとか、個人本位にしようとか、世界主義にしようとか、人類愛に依つて行かなければならぬ、國家を思ふ所の愛國心などは舊いとかといふやうな事を言ふ者は、それは工場に限らぬ、社會に於いても害毒である、殊に勞働者のやうな單純な、洵に正直な眞つ直な考への人々に「國家を思ふのは舊い、人類愛がよい」といふやうな事を言ふ者があつたとしたならば、それは非常に危險な事である。それが危險思想を植えつける所の開拓である、危險思想の種を播くために即ち土壤を作るものである、そんな危險な者は決して入れるべきものではない、工場に於ては最も國家本位で行かなければならぬ。國家の保護がなかつたならば工業といふものは成立つものではない、今現に支那なら支那に於て日貨排斥といふ事をやつて居る、これが爲めに日本の工業家も商業家もすべてこれ等の實業家が弱つて居る、「何とかしなければならぬ」といふが、愈々之れを有効な方法にするといふことになつたならどうするか、それは國家の力を以て、それを代表する所の軍人などの力に依つて、彼を膺懲するなり彼の言ひ分を改めさすなりして、始めて商工業は成立つて行くのである、その場合は國家の力である、今亞米利加に於て日本の勞働者を亞米利加の勞働者が排斥して居る、カリフォルニヤにもう日本人が行けないといふのは、日本の勞働者を亞米利加の勞働者が排斥するのである、この問題は日本が隱忍して居るけれども、いよ〳〵火蓋を切るといふ時になつたならば、日本の勞働者が之を征服することも出來なければ膺懲することも出來ない、即ち忠勇せる軍人の力に俟たなければならぬのである。軍人は皆日本の勞働者を保護する者である、日本の勞働者といふものは國内だけで生存して居る者ではない、世界的の貿易關係、即ち經濟競爭の上に立つて行くのであるから、その世界の經濟的優勢なる位置を維持して行く者は國力である、國が衰へたならばその國の生產品が如何に立派な物を造つても人が買ひはしない。現に私は印度のことに就て、印度の窮迫の狀態を聞て實に同情に堪へぬと思うた、印度に於ては、英吉利人などが加はつて經營して居る會社の物は何でも良く扱ふけれども、印度人のみに依つて經營して居る會社で、資本家も經營者も皆印度人であつたならば、その會社の生產品を停車場に持つて行つても、容易に汽車に積んで呉れない、何處かへ藏ひ込んでしまふ、それから調べて呉れと言つて催促いて行く、漸く一ヶ月も二ヶ月も經つてから向へ送る、送つた所でいよ〳〵註文者の手に渡るまでには三ヶ月も四ヶ月もかかつてしまふから、會社から送り出した物が季節の間に合はない、夏物の註文が十二月頃になつて屆く、冬物の註文が六月頃になつて屆くといふやうな譯だから、そんな會社に註文しても仕方がないと言つて誰も註文しない、直ぐ會社は潰れてしまふ。國力の援護を受けずしては工業は成立つものではないのである、だからして國家本位でなければならぬ、資本家の幸福も勞働者の幸福も、國民全體の幸福も、進んで世界の文化を建設することも國力に頼らなければならぬ。國家が衰へれば世界の文化に貢獻することは出來ない、露西亞のやうなことになつたならば、あちらに行ても泣を入れ、こちらに行つても泣を入れ、いろ〳〵な騒ぎのために世界を毒するのみである、又今日の支

那なら支那はそれである、支那は世界の文化に貢献するといふよりも、世界に厄介をかけて、東洋の平和を紊さんとするが如き不安な狀態に居る、世界に貢献するどころではない、非常な損失を與へんとするものである。その國が衰へてしまへば支那の勞働者がいくら働かうが何しようが、世界に貢献することは出來はしない、世界の文化は國家的組織、國際的關係の間に成立つて居るものである。

それを或る時期に於てこの國家組織を壞はしてしまつて、一つの社會といふ新世界になるなどといふことは、それは夢である。決して左樣な事にはならぬ、曾て左樣な事を夢みた者があるけれども、さういふ事は出來ない、といふのは國家には團結力といふものを有つて居る、社會といふものは此の團結力を有たないのであるから、サウすると團結力のある者が社會を征服してしまう。日本なら日本が今この國家組織を破壞したならば、他の國が來てこの日本の利權を奪つてしまふ。露西亞が今日のやうな事を永くやつて居つて、何時までもアヽいふ狀態を繰返して居つたならば、必ず將來他の國家といふ團結の爲めにやられてしまふだらう、それはどうしてもやられざるを得ない、又やる者が出來て來る。大體日本などは人が良いからやらないだけであつて、これが日本にあらずして、モット性の惡い國であつたならば必ずやる。一旦國家といふものを解體したからと言つても、必ずサウ云ふ團結を以て事を爲さんとする者が現はれて來る、餘程以前に佛蘭西あたりにサウいふ事をやつた時代があつたけれども、山の中に隱れて居つた軍人が一聯隊ほど居つて、それは武器を持つて居る、他の者は皆武器を捨てゝ鍬を持ち金槌を持つて居る所にやつて來て、サウして「言ふ事を肯かなければ打殺すぞ」と言つたので、その一聯隊ほどの軍人の爲めに支配されてしまつた事がある。その時にはサウいふ社會主義を行つたやうな人間を何でも百人斬の大きな鋸を拵へて、一遍に百人づゝチョヅ〳〵と頸を斬つてしまつた事がある、だから武力を有たなかつた時に於ては、どんな不法なる壓迫に對しても服從せざるを得ぬのである、それはサウいふ事になれば面白いから直きに出て來る、鐵砲を突きつけて、「コラ、俺のいふ事を肯け」「そんな事はモウ廢めたんちやないか」「お前の方は廢めてもこつちは廢めない……」といふやうなことになる、そんな事を夢みて居つても仕樣がない。

幸に日本だけが斯ういふ立派な祖宗の後を承けて團結的に進んで、殊に皇室を中心にしてそこに忠勇義烈の大和魂が養はれて來た、この美風を一旦破壞したならば、それは取りかへすことは出來ない。それで物を試驗に供すると言つても、モルモットとか兎とかいふやうな物ならば試驗に供するも宜いけれども親父の頭を試驗に供することは出來ない、親父の頭よりもより大切なものが大日本帝國である、この大日本帝國を「一つ試しにやつて見ませうか」といふやうな事をいふ者は、實にこれは逆賊である。そんな不確實な事を試驗的にやるといふのは、露西亞みたいな國は宜いだらう、目的の明かならぬ國は試驗的にやつて見て、王樣を殺して見たり、銀行を破壞して見たり、結局食ふ物が無くなつてしまつて、頸を吊つたり或はひぼしになつたりする、それも面白いかも知らん。大體クロポトキンの社會主義といふものはサウいふのである、虛無主義であるか

ら「どうなつてもかうなつても構ふものか、灰神樂をあげろ」といふ、破壞混沌の世界にしようといふのであるから、建設といふものは少しも考へて居ない。「終ひには灰神樂が揚るだらう」といふ、それは揚がるに違ひない、家も何もブチ壞してしまつて、「雨が降つても居る處が無い」、「濡れて居たら宜いぢやないか」、「食う物が無くて死んでしまふ」、「死んだつて構はないぢやないか」、「死んだら舍利かうべになつてしまふ」、「舍利かうべになつたつて構はないじやないか、その眼の玉の所から草が生えて出るだらう……」サウいふやうな事である。左樣な兇暴なやけくその事を考へて、國家がどうなつても構はぬといふやうな事をいふのは、それが惡魔といふものである。

そんな兇暴なことを面白がつてやるやうな思想を受付けてはいかぬから、何處までも工場講話は氣の利いたハイカラ學者みたいな者は駄目である、熱心に忠勇義烈の大和魂の愛國的精神を吹き込まなければならぬ。それがわからないで舊いのナンのといふのは間違つた事である。この尊とい道德は億兆心を一にして世々厥の美を濟したるものであつて、子孫臣民の倶に遵守すべきところ、古今を通じて謬らず中外に施して悖らざるものである。この結構なる祖宗より傳へたところの日本の道德を舊いのナンのと言つて嘲けるやうな者は學者でも何でもない、馬鹿である。氣の利いたやうな事を言つて社會主義に似たやうな個人主義ぢや、人類愛ぢやと言つてマゴマゴして居る。そんなものは無論過去の東洋文化に於て辯度も研究された。孟子が出る前に今の個人主義のやうなものは楊子といふ男が「爲我主義」といふものを唱へた、何でも彼でも我が爲めにする、あなたの髪の毛を一本拔いて下さい、天下の人間が救はれるからと頼まれても、イヤいかん、天下の人間がどうならうが俺には關係は無い、髪の毛一本拔くのは痛いぢやないか御免蒙るといつて斷るといふ、一毛髪を拔いて天下を救ふべきも我れ之を爲さずといふ、それが今日の利己主義である、個人主義ナンと言つていろ〳〵言ひ譯はするけれども、個人主義といふものはいよ〳〵押し詰めて行つたならば自己中心であるから、それは兩々相容れざる時に於ては利己主義になるのである。「それは個人といつても社會を救ふ積りぢや」などと言ひ居るけれどもいよ〳〵それが出來ないとなつたならば、自分の利益である。犧牲といふことを排斥する以上に於ては、どうしても眞の仁の道德、義の道德といふものは行はれない。今一つは人類愛といふやうな事を西洋から受けついで、人道だの正義だのといふけれども、それは墨子といふ親爺が言ひ居つた、これは「兼愛」と言つて自分の女房だ、他人の女房だといふことはない、自分の親父も他人の親父もない、皆一列一體平等ぢやと言つて、惡平等を主張したものである。その爲我主義と兼愛主義を拒がなければ、即ち楊墨の說を拒がざれば聖人の道行はれずといつて仁義の道德が起つて、既に東洋に於ては數千年間そんな「爲我主義」だの「兼愛主義」だのは蔓出さなくなつて居る、今頃出て來るのは幽靈亡魂である。そんなものを西洋から來たと言つて思想家が大騷ぎをする、新らしいことも何も無いぢやないか、モウ古ぼけて黴が生えて居る、東洋に於ては孟子に依て覆へされてしまつた。孟子の出た時分には諸侯は楊子に歸せざれば

墨子に歸すと言つて、個人主義や兼愛主義を奉戴して居つたけれども、彼等聖賢の努力に依つて正しき教に歸した者である。日本は決して楊子や墨子の說は始めから入れない、大和民族はそんな愚論を容れない所の國民である、今頃新らしいナンといつてそんな事を言ふのは、實に東洋の精神文化の歷史を知らぬ者である。社會主義などといふ事も皆孟子の中にある、許行といふ者が、人間は耕して食んければいかぬと言つて、勞働生活をやかましく言つて居つた、その時に孟子が「或は心を役する者あり身を勞し或は力を勞す、心を役する者は人を治む、力を役する者は人に治めらる」と言つて居る。それは筋肉勞働で盡す者も精神の勞働で盡す者もある、然るにすべて筋肉勞働者のみになつたならば、これは文化の逆轉である、夷狄をして中華の文明に進ましむるのは宜いが、中華の文明を壞して夷狄の狀態に戻すといふことはない、幽谷から喬木に鳥が出て來て啼くのは宜いけれども、喬木から墮ちて鳥が谷底に轉げるといふことはいかぬと言つた、そんな事も古い話ぢや。左樣な事を今頃西洋から來た新らしいナンといふ、實に愚にもつかぬことである。左樣な譯であるからして、どうしてもこれは國家本位でなければならぬ、即ち國家主義である。

モウ一つこの工場敎化の主義として確立しなければならぬものがある。それは何といふ言葉で言いあらはしたら宜いか知らんが、共榮主義といふか、共存主義といふか、この社會なり工業なりに就て正しい理解を持たなければいかぬ、先づ社會に就て言へば世の中は持ちつ持たれつである、旅は道づれ世は情、情けは人の爲ならずといつて、本當は社會は共

存共榮の生活である。又工場に於てもさうである、併しその共存共榮といふことは、資本と勞働だけではない、私の言ふ「共に」といふのはすべてを言ふのである、資本家も勞働者も、又經營者も、世間の購買者も、あらゆる者がみな共存共榮で行かなければいかぬ、工場へ坊主が行つて講演をしたならば、「あの坊さんも達者で、歸りに電車に轢かれぬやうに……」ぐらゐは考へてやらなければならぬ、それをナーニ俺はあんな坊主に關係はない、電車に轢かれようが構はぬ、といふやうなことではいけない。世の中といふものは、會社の門番であらうが、會社に出入する丁稚小僧であらうが、人間といふものは共に温かなる精神を以つて人に接し、社會を構成するといふところの、共存共榮の精神をあらゆる方面に發揮しなければいかぬ、だから廣くいへば實業界に居る者から言ふならば、軍人とか或は敎育者といふやうな者も、そんな者は不用なものだと考へて居るやうではいけない、それは實業も大切であるけれども、國防も敎育も亦大切である。軍人から言へば又宗敎家は精神的に人を敎化する大切なものぢや、といふやうに社會が皆協力して文化の成立つて居ることを、もつと大きく理解しなければいかぬ。

この事を勞働者によく話をして、無論さういふ事のわかつた人も多いですけれども、尙ほすべての者が理解するやうに、社會の構成といふものは、大にして言へば精神文化と物質文化の協力である。その精神文化の中には道德、宗敎、敎育、敎化といふものが非常に大事なのである。物質文明の中には政治とか國防とか經濟とかいふものがそれ〳〵みな大切なのである。それは政治の上からいつても大きな役

所が出來て居る。陸軍省、海軍省、內務省、文部省といふやうに、それは皆それ〴〵の必要から出來て居る。それを各々に就て弊害を改善するといふ事は宜いけれども、たゞ勞働省といふもの一つにして一切を勞農政治でやつて行かうといふ、あんな露西亞みたいな事をして行けるものではない。そんな事をしたならば學者も無くなつてしまひ、宗教家も無くなつてしまひ、何も無くなつてしまふ。たゞ筋肉勞働者ばかりであつたならば、サア其の國の鐵道が壞れようが橋が壞れようが架けることは出來なくなる、今の露西亞の狀態はよくはわからぬけれども、汽車の窓など壞れたら壞れきり、橋がひつくり返つたらひつくり返つたきりといふやうな事は、モウ明かに知れて居る事實である、家なら家が雨が漏つても誰も屋根をなほす者が無い、石炭が無くなつたら家を叩き壞して焚いて居るといふやうな事をやつて、あのやうにすべて、破壞を以てやつて行き居つたならば、人間もやはり人物は無くなつてしまふ、今はまだ元の人間が殘つてやり居るけれども、これからは決して人物は出來はしない、どうしても國家社會の發達するには、良い政治家も出來、良い教育者も出來、良い軍人も出來、良い資本家も出來、良い勞働者も出來て、それが各々立派な人間になつて、相互に尊敬し合つて行かなければならぬものであらうと思ふ。この共存の主義を力說しなければいかぬ。たゞ勞働者の味方ぢやといふやうな事を言つて講話をして、勞働者の氣に入るやうなことばかり言へば、勞働者は手を打つて喜んで喝采するに違ひない、それで勞働者が歡迎したと言つて得意になつて歸るやうな馬鹿な者に、講話をさしてはいかぬ。たゞ一時の御機嫌を取つて喜ばせる爲めに講話をやるのではない、共々に眞理の在るところを探究し、社會の爲め國家の爲め、又往いてはそれが各自の幸福の爲めに間違ひの無い正しい理解を交換して行くのである。工場だけに就て言うても、それは無論資本家も大事、勞働者も大事、經營者も大事、又その出來たところの生產品を消費するところのお得意も大事、そこに社會といふものがあつて共存して居るのであるから、社會も大事、國家の力の保護があるから國家も大事、又天地の間に產出したる物を皆使つて居る、工業といつても天地の間に產出したる鐵なり石炭なり木なり土なりを以てやるのである、みな天地の惠の中にすべての事業も成立つのであるから、この天地の偉大なる恩惠に感謝しなければならぬ。たゞ勞力のみに依つて、勞力萬能、勞力絕對といふやうなことは、これは即ち惡魔の言である。資本萬能もいかぬけれども、勞力萬能もいかぬ、國家萬能もいかぬ、それは皆協力してこの世の中が成立つといふことを理解しなければいかぬ。それが私は大きな意味に於ける文化の統一的理解と言ひますか、文化の統一大成といふことを理解して行くところの主義私はそれを大きな意味の共存共榮主義と言ひたいのであります。

私は假にこの三つを擧げて、精神主義でなければならぬ、國家主義でなければならぬ、共存主義でなければならぬといふ事を申上げましたが、さういふ教化の主義を確立しなければいかぬ、誰でも工場の教化をやつて宜い、坊主なら宜いだらうといふけれども、坊主の中にも國家主義を確立せぬ奴がある、又共存主義といふ事がわからないで、勞働者の味方

をした方が氣が利いたと思つて居る、それが今日は澤山出來て居る、今日の水平運動などの中に加はつて居る宗教家は、共存といふ事を忘れて居る者が澤山居る。前年の大逆事件の一味の中にも坊主が這入つて居つた、禪宗坊主もあり眞宗坊主もある、法華の坊主は這入つて居らなかつたけれども、法華の中にもこの共存共榮の主義を忘れた者は無いことはない、探せば幾らも出來て居る。だからそれは坊主だからと言つて安心はならぬ、耶蘇の坊主は無論安心ならぬが、佛教の坊主も安心ならぬ、又神道ちやといつても大本教みたいなものが出來て、皇室の尊嚴を毀けるやうな馬鹿な者が幾らも居る、少しも安心は出來ない。だからこれは社會自身に於ても、又國家に於てもモウ少し精神の問題に於てはつきり方針を立てゝ、現代を救ふには精神主義ならざるべからず、國家主義ならざるべからず、共榮主義ならざるべからずといふやうな工合に、思想律といふものをモウ少し鮮明にして行かなければならぬ、殊に工場講話に於ては、前に申す理由に依つて、勞働者は思想が單純であり正直であつて、さうして直ちにそれを確信して進むところの辛直なるものであるが故に、そこには間違つた思想は禁物であると私は言ひたいのであります。

それで自慶會には多數の講師もありますけれども今申したやうな主義方針に於ては、一人もそれに違つたやうな態度を執つて講話する者は無からうと思ふのであります。今までの多くの自慶會の講話はみな同一主義の下に働いて、微力ながらこの工場教化に貢獻して來たものであると思ひます。

四、政策の確立

次に申述べたいのは政策の確立といふことであります、これは國家からの事であります。國家が工場取締法とか工場規則といふやうな者にのみ熱中させられて、又社會政策といつてもすべて物質的にのみ考へられて居るこの政治上の頭腦をどうしても改善して貰ひたいと思ふのである。氣の附いた人も少しはあるかも知らんけれども、全體としては今の政治政策は唯物主義である。社會政策といつたならば貧乏人にどうして食はすかといふやうな事を考へる、工場取締規則といへばたゞ衛生の事とか、さういふやうな事だけである、精神的衛生、精神的食物といふものは殆んど考へられて居ない。斯ういふ風なあたまはそれこそ舊いあたまである、そんな舊いあたまで以てこの活きた人々を導かんとする事ほど危ないことは無いのである。さういふ衛生の事、むやみに氷を飲んだら腹が下痢るぢやないかといふやうな事は、そんなにやかましく言はないでも、それこそ各人の常識に俟ち、學校の教育に委ねて宜いのである。特に注意しなければならぬのは、いま少し高いところの、時代を嗣ひするところの人心の頽廢から來る唯物主義、この利慾のために、人間の劣情のために人間の腐らんとするところの、この大事な所を高潔なる教化によつて之を救はなければならぬ。又澎湃として來る歐米思潮に我が國民精神を奪はれんとする、これに對して健全なる思想を維持しなければならぬ。その目標はすでに明かな事である、人心の頽廢と思想の惡化とを防止撃退するがためにするのであるから、それが爲めに社會政策も講じなけ

ればならぬ、それが爲めに工場規則も考へなければならぬ。

既に海軍の方に於ては職工條例の改正をされた、それは今の岩野少將が海軍省に居られる頃で、自慶會の創立者でもありましたが海軍の方に於ても現職であつて、いろ〳〵海軍工廠の職工の善導に就て心配をせられて、工廠長會議の時分に何處からかその建言が出ることになつて、その會議の決議として、職工條例の中に、必ず職工の精神善導といふ事を工廠長は責任を帶びてやらなければならぬことになつた。吾々もその原案を見ましたが、毎月その狀況を報告せよといふ事であつたやうでありました、私の意見も聞かれたから、毎月といつても氣の毒だから三ヶ月位になさつたらどうでせうかと言つて、こつちの方から少し軟らかに言うた位に海軍省の方は熱心であつた。それが今日は實行されて居る、實行されて居るから海軍の工廠はそれだけの影響が何處かにあらはれて居る、必ずあらはれて來ます。陸軍の方ではまだ砲兵工廠はじめ左樣な精神善導といふ事をそれ程に根本から定められて居らぬ、その時〳〵によつてやつたりやらなかつたりして居る、私も時時小石川にも行き、王子にも行き、名古屋にも行きますが、やつたりやらなかつたりして居るので、さういふ事が歴然として確立しないのは甚だ殘念に思ふ。官營事業の如きは無論精神敎化といふ事はちやんと規則に於いて月に何回なら何回實行すべしといふことを規定するぐらゐの事にならなければならぬ。又工場に於ては職工の方からも精神敎化といふ事をやらぬやうな工場は甚だ不完備のものだといふ事を明かにして、ドン〳〵自から請求せられるくらゐにしたい。

さうして社會政策をやる上に於ても、今日は社會敎化といふ事と社會政策といふ事を別にして居るが社會政策の中には社會敎化といふものが最も大事なことである。社會局といふものが、社會敎化をやらないで居るといふことは、間違つて居る、それで社會敎化といふものは文部省の社會敎育課に於て少しばかりやつて居る。そんな事ではいかぬ、社會政策としては、人心を緩和善導することが第一義である、物質はこれに次ぐものである。ところが平凡なる政治家から見ると、物質に飽滿せしめたならばさういふ不平は起らぬと見て居る、それは非常な誤解である、これは思想の產物であつて、如何に、物質に飽滿しても起るのである。その證據は景氣の好い時にストライキが餘計起る、又或る會社が多額の金を出して、三百何十萬圓とかいふ金を與へた、その時分に經營者は、彼等は金さへやつたら文句は無からうといふので與へた、ところがもう數ヶ月後にはその貰つた事を忘れて、直ぐ非常な爭議を起した、又金を增してやる、少し經てば又やる、そんな事は何ぼやつても彼等は滿足するものではない、終ひには奪はずんば饜かずで、その會社を乘取つてしまつても尙ほ且足らぬといふことになるのである。併しながら斯う言つたからといつて、吾輩はそれが爲めに勞働者が當然な利權を擴張することを一概に否定するのではない、たゞそれだけで安定すると考へて居るその料簡を攻擊するのである。自己の權利利益の主張は適當の合法的なる事はこれは誰でもやるのが當然であるけれども、たゞその權利の區域を超えたり、利益をむさぼるが爲めに却つて工業が衰頽して、往

いて工場を閉鎖するとか、日本の經濟界の不況を來して、職工が全體として剩つて來たら、終には自分達が困るといふ事を彼等は考へない。ただ貧窮さへ高くなつたらそれで幸福だといふやうな、極めて淺薄な考を私は否定するだけのもので、往いて國民全體が幸福になる事を誰が反對する者ではない、そんな事は狂人でない以上當然の事である。祠胞國民みなが成べく都合の好いやうにといふ事はモウ言ふ迄もない話で、少數者が横暴贅澤をして宜いナシといふ事に贊成するやうな者はあるべきではない。たゞその手段方法に於て意見の相違があるのである。これは無論私は精神問題として研究しなければならぬと信ずる、西洋の物質的解決の型を調べて來て、それが唯一の事の如くに說明する側の方が今日は多いことになつて居るが、それでは日本の勞働問題は決して解決せられないと私は信じます。

五、講師の自警

次に一言したいのは講師の自警といひますか、反省といひますか、みづから警める事であります。講師は工場講話をするに就ては、いろ〳〵自から警戒し反省してかゝらなければならぬ點ありと思ふのであります。たゞ自分が佛敎家であるから佛敎の話をして居るとか、耶蘇敎者だから耶蘇敎の話をして居るとか、さういふやうな簡單なあたまではいかぬ。工場は今申すやうに非常に多數の勞働者が集つて居るのであるから、その一つの話がどういふ影響を及ぼすかわからない。たゞ自分の敎會堂に於て人類愛を說いて國家主義を否定したならば、それは狹い敎會に於て自分の信者だけに話したといふならばまだ害は少ないけれども、この血に燃え熱に燃えて居る多數の職工に對して、宗敎の話だと言つて、宗敎の名に隱れて國家主義を否定して人類愛を力說することは、假令耶蘇敎者であらうが佛敎者であらうが、それは甚だ不都合なものである、それは國家を誤るものである、名は宗敎の宣傳に藉りて居つたところが、自分がサウ思つて居るとしても駄目である、勞働者に話をするのは、爺婆に話をするやうな輕い事ではない、一言一句と雖も健全なる思想でないものは駄目である、そんなたゞ聽衆が手を打つて呉れるからといふやうな事で言ふべきものではないと私は信じて居る。これは他にさういふ人があるか無いか知らんけれども、たゞ職工の歡心を買はんが爲めにさういふ話をする者がありとしたならば、大變な間違ひである。それは宗敎の中には平等の側もあり、個人の側もあり、富豪を罵るやうな側もあり、又國家よりも廣いものを說いたやうな所もある、都合の好いやうな話は幾らでもある。さういふ事は論語の中からでも佛敎の中からでも何ぼでも言へる、併し現代を禍いするのはさういふ思想傾向が禍いするのであるから、どうしても國家主義でなければならないといふ事を力說しなければならぬ、さういふ事は講師が自からよほど警戒してかゝらなければいけない。

それから自分が演說や說敎が下手な爲めに職工を飽かして、「そんな話しはつまらぬ」と言はれるやうな事ではいかぬから、工場講話に當たる者は、熱烈に全力を注いで、「成程尤もだ」といふことで彼等が感激をして、正しい理解を持つやうに、所謂獻身的に、國家に貢獻し、文化に貢獻するところの大なる

道念を以て、工場講話に當るべきものであらうと思ふ。

さういふ點はいろ〳〵講師として反省しなければならぬ。私は何も一々講師の小言などを言ふ譯ではない、自分も不束な者で、言ふても自分も及ばぬことであるから、自から始終反省をして私はやつて居るのでありますが、さういふ點を注意しなければならない。今日は自慶會以外にもいろ〳〵工場講話をする會は出來て居る、自慶會はその中に於て先づよほど早い方でありますけれども、それから後いろいろのものが出來ました。又或る意味から言へば名をさういふ事に藉りて工場に立入つてどうしようとかいふやうな、自利心から起つたやうな劣等なものもありますから、これは講師といふものに就いてはよほど警戒しなければならぬのであります。

六、講師の養成

尙ほ進んで言へば、これは講師の養成といふ事が大きな問題なのであります。國家がやるなら、國家がそこまでやらんければ、工場團體に於て、例へば東京府にはこの商工奬勵館を造つた工場組合といふ工場主の組合がある、さういふやうな所に於ては立派な講師を養成すべき方法を講ぜられなければならぬ。又自慶會の如きも、自から講師を養成する力は無いから、講師の養成を爲すべき方法に關して研究を積んで、それを實現すべく努力しなければならぬ。今現にやつて居る者は皆な非常に忙しいからといふので、それで人が足らぬ〳〵と言つて自慶會が手を束ねて居るといふことは、自慶會として任務を盡さぬものである。これは今までは先づ試みにやつて來たけれども、だん〳〵工場教化の必要が明かになつて來れば、講師の養成といふ事に就て、これを國家に建言するなり、或は工場主を勸誘するなりして、これを實現すべきものだと思ふ。

七、經營者の自覺

いま一つは經營者の側に對して、經營者の自覺、經營者の心得といふやうな事に就て申上げたい。これは或る一部の經營者は工場教化に就て非常に熱心でもあり、立派な自覺もお有ちになつて居るけれども、先づ多數の經營者といふものはまだ自覺しない、工場教化といふものゝ價値を認識しない者が多い。さうして惡化されたる職工が、「そんなものは聽く必要は無い」と言へば、「あゝさうか」と言つてポカンとして居るやうなものがある。學者といつてもやはり職工の中の二三の惡い者が報告でもして、「そんな事を言つたつて何等の効果もありませぬ、皆嘘つて居ました」と言へば「ウンさうか」といふので、それを眞に受けて工場教化は無効力である、不必要であるといふやうな事を言ふのでせう、それは皆な無責任な話である。人間が教化に依つて善化されぬといふことは無い、これは古今を貫いて居るところの大眞理である。それが教化に依つて善化しないものならば、道德も宗教も無いものである、古來の聖者哲人といふものは、皆暗愚な事をやつたことになる、釋迦も馬鹿なら孔子も馬鹿である。併ながら事實はさうでない、それを馬鹿と言ふ人が却つて馬鹿ナンである、釋迦や孔子は即ち千古の達人である、人間は教ふるに道を以てし、導くに教化を以てすれば、如何なる者でも化せられざる者は無いのである、教

化の可能といふ事によつて人間は價値がある、若し人間が教化されぬといつたならば、それは人間の價値を一遍に拋棄してしまつたものである、この位人類を侮辱した言葉は無いのである。然るに教化は無效力であるといふやうなことを、簡單平易に言ふ經營者がある、それは實に思はざるの甚だしい事であります。それから又必要を自覺せられても、その必要の程度が非常に輕微である、教化をする時分にはば自分も手でも沈つてそこに參列もし、共々敬虔の態度を以てその教化を受けるといふ風にしなければ、效果は無からうと思ふ。それは昔の名君といはれた人は、例へば備前の池田侯が經書の講義でも聽くといふ場合、閑谷黌へ行つて自分も學生と同じやうにあの藥の圓座を敷いて謹聽をせられた、藩主や大名であつても聖賢の教を聽く時分にはちやんと學生と同じ態度でやられた、又明治天皇が副島伯に下された宸翰を拜すれば「朕道を聞き學を力むる豈一二年にして止まんや、將に畢生の力を竭さんとす」とお書きになつて、修養に就ては畢生の力をつくすといふ事を仰せられて居る。古來の偉い人はみな精神教化を第一に置いて居る。現代の文化はひろく世界的に人間の精神教化といふ事を侮辱したからこんな事になつたのである。倫理といふやうな言葉はあつても、たゞ倫理々々といふだけで何だかわからぬ、この間も或る學生が大迫閣下の所に書面をよこして居つたが「中學の倫理の科目の時分など伯父さん來て御覽なさい、あなたは吃驚するでせう、其間の光景は欠伸、居睡、私語といふやうな譯で、先生の講義を眞面目に聽いて居る者は殆どありませぬ」といふやうな事が書いてあつた。それは少し誇大であるかも知らんけれども、今日は中學などで倫理といふ事は教へるけれども、それは昔から偉い人達が修養を積んだといふやうな事とはまるで趣きを異にして居るやうに思ふ。それだけ現代は墮落して居るのである、誰が惡いか知らんけれども、まるで人間が精神的修養といふ事を侮辱してしまつて居る。

これはどうしても工場の經營者がそこを一つ自覺せられなければならぬ。それ故に自分も宗教の信仰をお有ちになるが宜しい、相當の月給を取るからといつて、いつも會社の歸りがけには自働車に乘つて何處かへ行つて酒ばかり飲むといふやうな事ではいけませぬ、どうしても自から任じて多數者を指導するといふに就ては、人格上から考へて世の中をお渡りにならんければ、一方ばかり立派になれといつて、自分はグデン〳〵に酒に醉つて居るといふやうな事では、それはその工場を率ゐて行くだけの資格の無い人である。工場内で起るところの勞働者の惡化はそれが工場内だけの禍ひに止まるならばどうでも宜いけれども、その工場内に於て惡化したるところの職工が社會に出て國家に禍ひを及ぼすといふことになれば、それに依つて利益を得て居つた資本家なりその中に月給を取つて居つた經營者といふ者は、左樣な不都合なる者をつくり出したところの責任を分たなければならぬ、國家社會に對して申譯の無い譯である。それを巡査に依つて鎮めるとか、軍隊に依つて鎮めるといふ事になつても、それはモウ工場内の問題ではない、社會に問題が移つたと言つて、卷煙草をくはえて知らん顔をして居るといふことは、甚だ自覺の足らぬものである。それ故に私は經營者はこの問題をよほど重い事に自覺せられんければな

らぬと思ひます。

それに就て一例として申上げるならば、私が或る會社に行つて話をした事がある、それは會社の名前を擧げることは控へて置きますが、岩野閣下と御一緒に參りましたから岩野閣下は御記憶でありませう、或る會社に講話の招待があつて行きました、その會社は尤もその前から講師がいつも不服を言うて居りました、一度そこへ行つて歸つて來ると、皆モウあんな所へは行かん〳〵と言つて居つた、澤山經驗した人がありますが、私は自分の直接の經驗を申上げるのであります。その會社へ行きましたところが、職工は少しばかり寄つて居つたけれども、その横の所で鐵骨の建築をやるので、ガーン〳〵とやつて居る、それが澤山の鐵を直ぐ傍でガーン〳〵叩いて居るのであるから、如何なる大きな聲で話をしたところが、人間の聲など聞える場合ではない。さうして社員の人は一人も殘つて居らぬ、皆自分の事務室を閉めて歸つてしまつた、それからそこに居る下女みたいな女に、社員の人はどうしたと聞いて見ると、今みんな歸りましたと言ふ、誰も案内して呉れる者が無い、それから行つて見たところが職工は雜然と寄つて居つて、傍でガーン〳〵やつて居る。尤もその工事は會社の仕事ではない、他の建築請負が這入つてやつて居るといふ事であつたけれども、それにしてはそれを一時止めさすことが出來なければ、靜かな所に位置を移して話をするなりどうにかしなければならぬ、人間の聲といふものには限りがある。それでもこつちは仕方がない、頼まれて行つた以上やらぬ譯にも行かぬから、大きな聲をして、聞えても聞えなくても仕方がない、出來るだけ大きな聲で

どなつて、さうして汗をかいて、何處かで休息しようと思つたらその部屋が無い、事務室はみな閉めてしまつてある。それから岩野さんが氣の毒がつて女中に談判して、何處か開かないかといふので、二階の方を無理に開けて暫く腰かけて歸つて來た事がある。さういふやうな事は誰の責任にしても、どうも東京からわざ〳〵遠方數里離れたところに行くのにさういふ茶を一パイ飲むことも出來なければ案内する者も無いといふやうなことは、これは經營者の怠慢、不都合、實にそれは許すべからざる事である。さういふあたまを以てやつて居るのであるから、勞働狀態がどんなに變つて行つてもそれは仕方がない譯である。

さういふやうな事があるから、私は經營者に立派な自覺のあられる人も、だん〳〵尊敬すべき人を認めて居りますけれども、まだ〳〵日本の工業の全體としてはやはり經營者が工場教化といふ事に就ては自覺が徹底して居らぬと思ひます。それを自慶會は自分の方でやらぬ迄も、工場教化の必要をモウ少しよく話すが宜からうと思ふ。

八、教化の普及

さうして願くはあらゆる工場に於て教化が普及して、モツと有効に行はれるやうになることを國家の爲め社會の爲めに熱望してやまぬ者であります。

九、教化の效果

次に申したいのは教化の效果であります、これは私の經驗だけを申します。工場の教化が効果があるか無いかといふことは、前に言ふ人間の教化といふ

事の關係から言へば無論有効に相違ありませぬが、併し効が有るとか無いとかいろ〳〵に言ひます。それは惡化してしまつたものはちよつと效果が擧らぬでせう、それは恰度刑罰を課して囚人になつた者を、免囚保護事業でこれを善化しようと思つてもなかなかその效が擧らぬと同じことである。一旦惡くなつてしまつた者は、或る程度以上に惡くなつた不良少年はなか〳〵良くならぬやうなもので、なか〳〵效が擧らないから、左樣に惡くならない者を先づ敎化をして行くものとしなければならぬ。最初から耳に蓋をしてしまつた者は仕方がないけれども、その話を聞くものとして考へたならば、敎化の效果はよほど私は吾々が期待する以上のものであると信じて居る。彼等は非常に聞き方が熱心であり、又その慾求も強い、その實例を少しばかり申上げます。私は自分が實驗をして居る事で澤山その材料を有つて居りますが、實に私はその點に於ては勞働者に對して衷心より敬意を表して居る者であります。

最近――本年の五月の事でありますが、神戸の脇の濱に鈴木製鋼所といふのがあります、大分澤山の職工が働いて居りまして、全部で二千人以上居りました、現在に於ても居りませう。ところがこれ迄は これを二度に分けて話をしたのですが、その講話を聽く時間に對しても給金を與へて居りました、大抵今ではどの會社でも給金を與へてやつて居りますが神戸の製鋼所は、經營も困難の事情もありますけれども、たゞ給金を與へて義理で聞かして居るのでは分らぬ、といふので、一つは何でも職工の中の吾々から見て惡化した者が、さかんに「こんな講話など聞きたくはない、そんな事は無效である」といふやうな惡聲を放つたので、經營者が迷つたものと見えます。無效であるならば廢めるといふ下考へもあつたかと思ひますが、私が行つた時分にはつまり試驗的のことでありまして、それはなか〳〵えらい事であつた。その給金は何でも一時間が二十七錢とかに當るさうですが、それを與へることを廢めたといふ事を通告して、その代りに講話は任意である、必ず聞けとは言はぬ、希望者だけ聞けといふ事に變更をした。その第一回の試驗が、私には通告なしに行つた時に突然さういふ事を言ふのでありまして、それが五月の事であつた。それで來るだらうか來ないだらうか、どの位來るだらうかといふやうな譯でありましたが、彼處には恰度都合の好い講演場を最近建てまして、それだけの者を容れられる、丁度千人乃至千二百人ぐらゐ容れられる會場が出來ました、

それで腰掛がズーッとありますから數がまことによくわかる。だん〳〵時間が來ましたところが、平素給金をやつて居る時より餘計這入つて居る、それが面白い、餘計這入るといふ原理はどうしても出て來ないけれども、却つて給金を貰ふ日には事情を構へて歸つた者までが「給金をやらぬから吾々が講話を聞かぬと思つて居るのか、馬鹿にする」とでも思つたのだらうと思ふ、又或る人格ある勞働者が指導したものと見えて「給金を渡さぬから吾々が講話を聞かぬだらうナンテ、馬鹿にして居る、人格を無視するナ」といふやうな話だらう、一パイやつて來る。今まで給金を貰つて居る時よりどうしても二百人以上多い。それから重役の田宮といふ人が、あとで事務所へ引上げてからの話に、どうもこれで安心もしたし、又勞働者に對する吾々の考が間違つて居つた、

大いに敬意を拂はんければならぬといふやうな事でなか〳〵澤山の事がその事實によつて話されて居つた。それが五月の事で、さて次の六月にも參りましたが、丁度その日はえらい雨でザア〳〵と降つて居る、今日はどうだナ、先月は一遍さういふ事だつたけれども、今度は時間も少し仕事が多くて、先には三時半からであつたが今度は四時半からになつた、四時半の職業を終ると丁度五時頃になる、腹もへつて居るしするから歸る者が多いだらうと思つたら、やはりその大雨の中に、前回よりは少し少かつたけれども、それはモウあの大雨では到底來られないし時間の都合もあつたから已むを得ない、先づ成績から言へば前回と同じほどやはり這入つて居る、これに就ては私も感服をしました、だから勞働者がこの教化を要求して居る點も、それに就て共鳴して居る點もよくわかるので、二三の者が入代り立代り惡聲を放つのであるけれども、善良なる職工は全部——一人や二人はどうか知らんけれども、先づ全部さういふやうに立派な理解を持ち、人格を持つて居るものである、給金をやるから已むを得ず聞いて居るのだ、給金を廢めたら半分も減つてしまふだらうといふ事の想像は、さういふ考を持つて居る學者や、さういふ事を考へて居る經營者があるけれども、それは皆間違つて居る。決してさういふものではない、モッと親しく人格を認めて、本當に教化を與へて行けば、國家社會を擔任する健全なる國民は勞働者の中にあるのである。これを不健全とあたまから考へて居るのは間違つて居る、モッと〳〵本當に考へて行かなければならぬ。

それから又他の例を擧げれば、この工場講話がどれだけの效果があるかといふことに就ては、あの神戸のストライキの時に、私は名古屋に行つて居りました。名古屋では愛知時計といふのが先づ一番模範的の職工とでも言ふべきものである、時計といふけれどもこれは軍機などを製造して居る立派な鐵工場であります。そこには森海軍中將が顧問になつて居られますが、私は神戸の爭議が名古屋へ飛火をしてはいけないと思ひまして、あの大きな神戸の爭議の勃發する事が私にはわかりましたから、そこで愛知時計の講話の時分に話した、愛知時計がやりさへしなければ名古屋は先づ大丈夫だから、君達が直ぐに輕卒に神戸に雷同するならば、名古屋をして大きな騷ぎにするやうになる、決して諸君等が合法的なる要求を吾輩は排斥はしないけれども、事はよく考へてやらなければならぬから、自重しなければならぬ、自重といふ事を忘れるナ、名古屋方面のあらゆる職工に對しては君達は一日の兄として、君達の態度を見習つてやるのだから、その利害もよく考へなければならぬといふ事を話して置きました。ところが間もなく神戸にあの爭議が起つた、それを眞似をしてやれ〳〵ッといふ議論が起つた時に、自重派とそれから即行派と二派に分れました、けれども結局自重派が勝つて、「まア〳〵待て〳〵、この間の講話にもあつたぢやないか、自重しなければならぬ、吾々の責任は重大だから、やらぬといふ事ではないけれども兎に角自重しよう」といふことになつた。さうして自重して居る内に神戸の爭議といふものは變てこになつてしまつて、無條件で屈服することになつてしまつた、そこで成程やらぬ方が宜かつたといふ事がわかつた。それから翌月でしたが一ヶ月置いてか

ら私が參りまして、この間私が講話をした爲めに、自重といふことを守られた、その結果、名古屋方面の職工及び工業家はどの位利益を得たかわからぬ、一場の講話がそれだけの效果を奏したといふのは、諸君等の聽き方が本氣であつた爲めであるから、私は謹んで感謝すると言ひましたら、彼等も熱心に手を打つて共鳴して居りました。さういふ事實があります。

その外尙ほ擧げれば澤山ありますが、勞働者が講話を嫌つて聽かないといふやうな態度を示しましても、それはやはり敎へざるが故であります。何も知らぬから、資本家の走狗として賴まれて來たとか、彼奴は謀し者ぢやとか、ナンだ坊主が、寢言しか言はぬぢやないかといふやうな、詰らぬ事を遠慮して彼等は反對して居るのでありますから、根據のある事ではないのであります。これはやはり名古屋の日本車輛會社といふ汽車電車の車輛を拵へる大きな會社があります。そこへ行きました時にはなか〳〵荒くれた職工で、さう惡い者は餘計でもありませぬが全部一度には寄れんものであるから七八百名の職工が參ります、その中の二十何人といふものはうしろを向いて居る、腰掛へ後ろ向に腰をかけて、肩を怒らして腕を突つ張つて、「そんな事聽くカイ」といふ態度を示して居る、それはえらい姿です。二十何人といふものがズート尻を向けて居る、けれどもだん〳〵話をして居る內に興味が湧いて來るものであるから、斯うやつて首だけこつちを向く、だん〳〵體をひねつて終ひにはとう〳〵こつちを向くやうになつた。それから隣りの初めからこつちを向いて居る者が、それを突ついて、「ソラ見ろ、初めにはナー

ニ聽くものかナンて威張つたつてやつぱりこつち向くぢやないか」と言つて肘を突つかれて頭を掻いて居つた。さういふやうな無禮な者であつても、それがだん〳〵やつて居る內にはすつかり改まつてしまふ。今日試に日本車輛へ行つてその職工の有樣を御覽なさい、軍隊の兵士が聽講するより以上の靜肅な、態度の立派なものになつて居ります。敎へざるが故にさういふ者があるのであります。

又事實工場講話の成績があらはれた事柄は、長崎造船所に海軍の方からこの頃磯崎といふ大佐が監督官で行つて居りますが、私が二ヶ月ほど前に行つた時にも、何千といふ職工を一堂に集めて講話をしたその時分の靜肅と謹嚴なる態度は、迚も兵士と雖もあれだけの禮義と作法とを守ることは出來ぬといつて、磯崎大佐が涙を流して感激して、實に職工といつても訓練すれば斯く迄のものかと言つて、本當に國家の爲めに祝すると云つて泣て居りました。それは長崎造船に限りませぬ、他の會社に於ても、先刻申した神戸の鈴木製鋼の五月の講演の時にも、そこにやはり軍機製造のために海軍の方から監督官が行つて居りますが、その監督官なども非常に敬服して、實に軍隊の規律以上に講話の場合には靜肅を保つて居る、私等自身までも感心する、實際えらいものだナと言つて居つた。これは迚も今立派な講習會などの場合、坊さんなどの會合といふものでも迚もあれだけの事は出來ない、職工の人は敎ふるに道を以てすれば嚴重に守らうとする、自分等は立派にならうといふ所謂向上心といふものが燃えて居る。であるからこれを放擲して置けば橫道に行くけれども、導くに方法を以てすれば一番敎化が有效にあら

はれて來るものはこの工場の講話である。私は他の佛教の講話なども澤山やります、學校へ行つて、中學校でもやるし、或は女學校で女の生徒に話す事もある、或は教員の方々に寄つて戴いてお話をする事もある、軍隊の講話もやる、坊主の會合にも出て話をするし信者の寄り合で說教もする、又民衆を相手に公開講演もやる、到る處に於て私はいろ〳〵の會合に出るから知つて居るが、今日は訓練せられたる職工の講話の場合が一番模範的になつて居る。この事もさういふ事實を理解しないやうな學者や役人が日本には澤山ある、職工などに話したところが迚も本氣に聽きはしないといふやうな、宜い加減な事を言つて居る。さういふものではない、そして如何にも愛國心が燃え、精神生活が輝いて居ります。

一つその精神生活の進んで居る事なども申上げて見るならば、長崎造船所の職工の間には信順會といふものが出來て居つて、みな合掌禮拜をする、それは宗教の異同を問はぬ、基督教でも神道でも佛教でもみな掌を合せる、さうして默禱をやる。工場へ這入つた時の瞬間、三十秒なら三十秒といふものはみなジーッと掌を合せる、それから夕方になつて仕事が終つた時にはちやんと掌を合せる、さうして月に一回信順會の例會といふものがあつて、集まつて話をする、その話の前後にはみな默禱をする、それはいろ〳〵宗教に依つて唱へる事が違ふから、口には出さない、默つて精神的にやる。この信順會が如何に純潔に發達しつゝあるか、この間も私が行きました時分に、この信順會の成績については會社の人が非常に敬意を拂つて居つた。さうしてだん〳〵會員の數が增加して來て居るので、モウ早や今に長崎造船所はこの信順會が中堅になつて、如何なる事でもそれに依つて穩當なる解決をされる日が來ることは、遠からざる事であらうと信じて居るのであります。

一〇、結論

時代は多くの人の考と違つて、一方は極端なる狂暴破壞に向つて居るけれども、一方は反省と信仰に戻らんとして居るものである。この間も私のところに言つて來たのは、大阪の國粹會の理事でありますが、國粹會は御承知の通り所謂遊び人といふものが主になつて居る、それがたゞ喧嘩の場合に飛出して人を叩いたり斬つたりする事だけやつて居つては國粹會の素質が改善されない、國粹會員の眞の人格の向上の爲めにはどうしても宗教の意義が無ければならぬといふので、少なくとも年に一度は伊勢大廟に參拜をし、彼岸と盆には祖先の爲めにその遊び人が團體を組んでその地方の大きな寺院に集まつてお經を讀んで貰ふやうにしようぢやないか、さうして平素も宗教的態度でやらう、又社會奉仕の活動をするために、火災とか天災の場合には國粹會員が先になつて道德的活動をしようぢやないか、といふやうな事の規約を作りました、さうしてその趣意書なり規則書を私に直はして呉れと言つて來た。必ず誓つて一年を出ですして大阪、和歌山、京都、奈良、滋賀、この五府縣に於て約三萬の同意者を得るつもりでありますといふ事でありました。命懸けでやるやうな事を言うて居りましたから、出來上る程度は三萬が二萬になるかも知れませぬが、兎に角本氣でやるだらうと思ひます。これは遊び人である、それで

もその間には宗教信仰の復活運動が起つて、必ず一年にして三萬人の信順會員的のものを作らうといふ決意を私の所に言うて來て居る。

今日の政治家なり或はその他の社會の指導階級に居る者が、民心の傾向の觀方を、たゞ一方の表面にうろついて居るものだけを見て、この思想的に嚴肅に反省して來たところの機運を看取することの出來ない事があつたならば――私は出來ないのだらうと思つて居りますが――それは國家の大事を誤るものである。此の機會に於て宗教心の如きは、もう內閣諸公をはじめとして維新當時の唯物主義に流れた誤解を一洗して、御皇室に於てはその事は明かになつて居りますが、政治家の方に於てはそれが不徹底でありますから、どうしても健全なる宗教――精神生活に戻るといふことにならなければならぬと思ひます。

以上申した事を結んで申しますれば、自慶會の仕事は工場教化が主でありますが、併しこれはよほど大切な仕事であるから、飽までも此の點に力を注いで、早くからこの事を自覺して斯ういふ會の出來たといふことは、確かに此の會の誇として進んでよからうと思ふのであります。

いろ〳〵勝手な事を申しましたが、私の信ずる所を申上げました次第であります。（了）

大震火災に就て社會部より

顯本法華宗社會部長　武田顯龍

九月一日午前十一時五十八分!!何と云ふ魔の時でせう、思ひ出すだに涙が滲み出ます、東京横濱其の他の關東地方で家を倒潰され、或は財を焼失した者が約二百三十萬人で、人の死傷する者十五萬餘、財を失ふ事百餘億圓、國力の約八分の一と云ふのですから、實に空前の大慘害と云つてよい。東京を中心にした近縁の人達は十一時五十八分の大地震に度肝を抜かれて、恐怖の情に捕はれてしまつたから、續いて起る餘震に怖氣がつきグラッと云へば直ぐ飛び出すと云ふ有樣、夜も木の根又は竹林に野宿する有樣であつたから、東京横濱の火災に對しては、消防に一臂の勞を盡すことも出來なかつた、私の住職寺なる東金地方で東京横濱の大火事を略知つたのは、一日の午後六時頃でした、二十餘里も離れて居る東金地方へ、一尺角位の焼けた紙の焼片が無數に木の葉の散る樣に飛んで來ましたが中に横濱のさる電燈會社名の印刷してある默發なども飛んで來たので、東京のみならず横濱も大火事だなとは思つたが、其の時には汽車は勿論、電信電話は全く杜絶して少しも他地方の模樣は判明しない、二日の午後からは流言蜚語が群蚊の鳴き聲の樣に傳はつて來て、或は鮮人の破壞的行動を傳へ、或は名古屋市の全滅を傳へ、或は將に大阪を焼かんとしつゝあるなど傳へられ、人心の動搖は實に激しかつた。從つて或は父母を、或は子弟を、慘害の巷東京に有する地方民も、已が血縁者を救助すべく努力することは出來ず、徒らに焦燥の情に捕はれて心配するに過ぎなかつた。斯の時に東京横濱の血縁者は火中に生不動となつた者、水中に難を逃れて其の後溺死せる者無慮十餘萬、地獄を此の世に現はしたのであつて、人類歴史あつて以來悲慘是に過ぎたものはあるまい。斯かる大慘害を前にし人々が或は修羅道に、或は餓鬼道に落ちて彷徨ふ樣を見ては、又一方流言連りなる巷に在つては、宗教家は袖手默視すべきではない。我社會部は微弱ながら此處に活動を起すこととなつた。

一、避難民救護

第一は避難民救護であつた、東京市中及び郊外に焼け殘れる二十餘箇寺は、一齊に門戸を開放して避難者を收容し、炊き出しをやつて一時の飢をしのがせた、今尚避難中の者もあるが、避難收容人員は約二千、延人數約七八萬に達して居る。關東地方の寺院に申すに及ばず、東北、東海、山陽に至る各地の我宗團所屬の伽藍は、各地方に於て率先救護に盡力し、或は金を、或は米麥を、或は衣類を募して各停車場前に、或は青年團と、或は佛教聯合會と、合同救護所を設けて合からがら魔の手から逃れて、思ひ設けもせなかつた又

顧もしなかつた里歸りの人を助けたことは數限りもない。此の地方救護班の中には自らは東京に兩親並に兄弟等三家族計十八人程の血縁の者と、會數人の親戚とを持ち、其の人達の安否を氣遣ひながら然も一方餘震續く眞最中に家を忘れ、我を忘れて五十に餘る老婦人が炊き出し及湯茶の接待等に骨身を惜まず働いて、見る人をして感激の情に、自然と泣かしたほどの美しい事實が澤山あるし、信仰團体の人のする事は誠心が籠つて居て、他とは異ふと感歎の聲を發せしめ、無信者をして信仰心の奬勵の種となつた樣な美談が澤山あつた。

二、人心の鎮定

大慘害に續いて起つて來たのは流言蜚語に迷はされて人心の動搖止むなき事であつた。不安の極に達して此の分でいつたなら、如何なる事態を惹き起すかもしれぬと云ふ有樣であつたから、人心の動搖を防ぐは急務中の急務なりと考へ、全國門末寺院に告ぐる處あつたのであつたが、東京及び郊外に於ては、未多現下の發企せられた安民護國佛教團と業態して、或は屋外に、屋内に、鎮定に大に努力したので効果も亦大であつた。近畿及全國各地方に於ては、同情心を呼び醒まし、救護事業に對する輿論の喚起と共に流言の妄說なるを說いて大に人心の鎮靜に努めたのであつた。

三、慰問救護事業

第三に社會部が門末寺院一般へ訴へたのは、慰問救護、並に失業者救濟事業と弔魂會執行とであつた。我宗團に在つては近きより遠きに及ぼすてふ東洋的道德主義に則り、先づ同僚にして全滅の厄に遭へるもの、即ち我教團の罹災寺院の慰問見舞より、門末禮信徒罹災者慰問、更に進んで一般罹災者に及ぶと云ふ順序であつたが、然し交通機關通信機關の杜絕した當時の社會狀態では、當路者の意志が一般へ徹底しなかつた爲に、各地方地方で夫れ夫れ便宜の方法に依つて効果の大ならんことを期した樣である。例へば關西門末寺院が――同友師の盡力大に與つて力あつたらうが――即刻數千圓を議決して罹災寺院救助にあたつた如き、又東都及び九州地方の諸師が托鉢行脚に依つて義捐金品を集めたのや、其の他各地方で澤山の金品を集めて直接罹災者に配布し、又は救護局に送附した如きで、何れも美談として誇ふべきものが多いが、中にも東金婦人會が幹事長家德けい子を始め、幹部の處置適宜を得、驛前の救護事業は更なり婦人の身を以て米十數俵と衣類壹千餘點を集め、是を貨物自動車に滿載して、死屍累々異臭紛々たる焦土の帝都に至り、一隊は亀戸方面に於て、一隊は上野山下浸岸方面に於て、直接罹災者に贈與した如き、又千葉縣の慰問隊が六千有餘個の慰問袋を東京に送り、堂宮川米會長岡秋葉田邊澤老澤森田山田の諸師十人が、裂裝衣を脱いで紺天着、又は洋服となり、珠數待つ手に荷車引いて兩と戰ひ、黃塵高丈を從して門末禮信徒罹災者を戸別訪問して、慰問品と慰藉の辭を呈した事や、東金コドモ會が「無問食デー」を作り、些細の金を紅葉の手に持ち寄つて數十金を托送したなぞは、同情心の奔溢であり此際せなければ人間でないと云ふ人間道の眞の現はれで、涙ぐましい程尊い事實で、後世への語り草にしたいと思ふ位である。金品勸募の方法や托送殯葬の手段經路等は、地方地方に依つて異つて居る、例へば北海道札幌市頭本寺の信徒が、大萬燈を市街に押し立てゝ街頭に獅子吼して同情心の喚起に努め、集まれる金品を市役所を經由して托送した如き、又朝鮮釜山の教會所が殉教者の活動寫眞興業に因る純益金數百圓を總督府を經由して托送した如き、或は托鉢行脚に依り、或は檀徒の戸別訪問に依ると云つた風に、異つては居るが宗團五百の會員が全部の能率を傾けて慰問救護と云ふ一つの目的の爲に努力したことは誠に機宜を得た尊い事實である。

私は此際勸募された金品の額や、量を算盤球にはじきあげて計數を皆樣にお目にかけようとは思はない。何故なら左樣な計數は同情心の薄であつて論ずるに足らない、只道俗が一團となつて同情の機ゆる思を心に秘めて、我を忘れ、家を忘れて、或は輿論の喚起に、或は慰藉の熱辭に、或は直接金品勸募に、熱禱し、獅子吼し、努力した事實が誠に尊いと思ふ。私達は此の事實を玉と思つて永劫に懷に抱きしめ、新生の旁生へと思つて注意深く培つて行きたいと思ひます。次に弔魂の事ですが、是は單に讃辭のみに依つて横死者の靈が慰められるとは思はれません、讀經に依つて弔ふ事も必要ではありますが、生き殘つた人達が震悚一番神氣一轉して、堅實な思想に依つて復興に努力し、禍を轉じて福となすと云ふ事實を實現して、始めて十全に死者の靈は弔はれると思ひます。弔魂に對して我社會部の取つた態度は是であつた。私の手元に集まりつゝある報告書に依つても明かでありますが、全國至る所の地方の寺々で追悼法會を行ひ、同時に健全なる國民思想と、確固たる宗教信念の鼓吹に依つて轉禍爲福な獅子吼して居ります。有難いことには本多管長猊下が累々たる死屍を焼きつゝあつた九月九日、同友僧正や岩野少將並に私等を隨へて被服廠跡（三萬五千人横死の寃所）に立たれて廻向せられ、更に芝浦等横死者の多かつた場所に行かれて御廻向せられた事です。我宗團の東京及近畿に於ける公私團体が、被服廠跡に又は吉原の寃の池（私が名づくるもの）附近に、異臭を犯して立願旗を立て、讀經以て亡靈を弔つた事は、數知れぬ程で、聞く處に依れば途上の人たちして「法華宗は異つたものだ」と感歎の辭を發せしめたこと數々だと云ふことであります。

四、今後の努力

大震災から十月中旬に至る間の我社會部の方針並指示事項の實行せられた概況は前述の樣に片鱗を述ぶるに留めて置きますが、今や世は擧げて復興に熱中して居ります。申すも長しきことですが、僅

か二ヶ月餘の間に　今上陸下は二度御詔勅を賜はりました。教家の任に在る者は大に奮勵努力せなければなりません。

今秋の地方長官會議に於ける首相内相の訓示に徴しても、前内閣前々内閣の各大臣の訓示に徴しても、宗教家の地位と其の功績とは漸く識者に認められ、識者を呈せられるの立場になりました。然し教家としての理想の立場から我等の行く手を眺むる時、果して未だ道遠しの感がないでせうか。日露戰役に勝ること數倍の大災害を受けた我國は、立正大師御在世當時の樣に、自界叛逆難と他國侵逼難とを豫想せなければなりません。内に剛健實質の國民的氣風を養ひ外に積極進取の大國民的態度を示すべく、國民精神を陶冶涵養することは急中の急務です、大正の立正安國論は六百年の昔よりも更に一層必要であります、是の安國論は私等日蓮主義者を外にして誰の口から唱へられませう、私等の責任は實に重大であります、私等は砲煙彈雨の第一戰線に起つたのです、私は宗教本來の意氣即ち第一義の上に於て、終た宗教の社會化の上に於て、宗教の道德化の上に於て、宗教の實際生活化の上に於て、自警自制相互水魚の思をなして層一層御奮闘御努力あらんことを御願ひする次第であります。

北陸東海道理方巡教誌

監督布教師　松本堅晴

曠古の天祟に際會せる我が大和民族は此の際大反省大決心大覺悟を要すべく、十月四日より北陸地方を始め各地を巡教せり。北陸方面は見玉布教師隨行、同師は「震災と國民の試練」と題し災厄の實況より現代世相を論じて國民試練の秋なるを述べ、予は「震災所感と國民の覺悟」と題し、國民性の發露、災厄地の實況所感、震災は天譴か、國民の反省自覺と信仰等に就て述ぶ。

十月四日夜高木信行寺、聽衆百餘、桑村、見玉、松本順次登壇、聽衆擧張盛會裡に終る。五日午後福井市妙經寺區内寺院參寺追悼大法要を修し次で說教、同夜大講演會、聽衆一百餘何れも感涙に嗚ぶ。六日午後南居妙正寺區内寺院全部來會極めて莊嚴に大追悼會を修し見玉住職の挨拶に次で說教、同夜再び說教、降雨なりしも熱烈なる信者實夜共百數十名道場寂として謹聽す。七日午後二時より釜屋本成寺追悼會堂に講演、檀家總數十二戸而も何等他の援助を仰がず十一月中四間半に五間の本堂新築の計畫あり、一總代曰く「日經上人の事を追懷しては堂の一ツ位建れば濟みません」と予壇上の終り常樂院に及ぶや、感慨胸に迫り落涙語を塞さずして降壇す、嗚呼。八日金澤寺院聯合本長寺にて午後二時より追悼會、夜講演會開催、降雨と他派寺院十餘の爲聽衆極めて少なし、教壇諸氏としては相當努力せしならんも一面以何合衆生の緊張味を缺ける感無き能はず、切に教壇諸氏の奮起を望む。九日山内本行寺午後講演夜追悼會堂に講演聽衆百數十名何れも熱心に參聽盛會。十日午後一時より今庄善勝寺追悼會堂に講演、非常の降雨なりしも熱烈なる聽衆四十名感激面に溢る、茲に北陸の一巡を終り見玉布教師と秋を別ちつ自坊に歸る。

東海道方面、　九月廿一日四日市安樂寺追悼會堂に講演、生憎の大雨雨なりしも、求道の參聽者約四十名來會す。十月十八日夜見付町立妙寺、莊嚴なる追悼會に次で講演、孫に豊橋より加藤少將の出演あり、聽衆は官公吏外約六百名近來の盛況。廿一日夜吉美妙立寺舊層御法難會に相當せしを以て參聽者滿堂盛會。十月一日三島町本妙寺に於て大士記參高寺と聯合追悼會堂に講演會開催、大津布教師の前講あり聽衆七十名。二日午後北松野妙松寺追悼會堂講演、降雨なりしも眞面目なる聽衆百五十名、日暮一人の去る者無く熱心に聽講何れも感激す。四日午前結川越境寺、午後刈谷町長遠寺何れも追悼會堂に講演、青年團赤十字等の會合ありし爲か何れも參聽者二十名内外。其他豊橋妙圓寺及名古屋教壇は管長現下御親教の下に莊嚴なる大追悼會堂に大講演會を開催せり。

以上の外野田、田原、白須賀、太田の諸寺院は農繁期に入りしを以て御會式前後に延期せり。

泣いて近畿中國路へ

國友監督布教師特派さる

國友監督布教師は金光布教師を同伴し本多管長現下の特命を受けて東京大震災の慘狀とその眞相や、震災に依つて得た教訓と之れに對する覺悟とを教へ傳へる可く、十月九日京都府木津を振り出しに、大阪府下堺、三島、兵庫縣明石、志方、姫路、岡山縣の和氣、草生、吉ヶ原、津山、鳥取縣の鳥取、青谷、松崎、倉吉を巡廻し、最後に同月二十日京都府綾部、新舞鶴に至る近畿中國路を國友布教師は泣いてその慘狀を訴へ、激してその覺悟を說き、何れも講演等に多大の感激を與へ効果を收めて帰任した、その布教日誌は本誌に記事輯録の爲省略した。

新舞鶴信行寺入佛假供養

日蓮主義者として知られてゐる佐藤中將が新舞鶴海軍鎮守府司令長官たりし頃日蓮主義は愈愈盛として勃興し、遂に一寺信行寺の建立を要するに震災に於ける慘害の大なりしだけ、地方民に對する刺戟強く深く、從つて一般聽衆の反省自覺は平素の巡教に倍し効果ありしを覺ゆ。

を見るに至り、名古屋より本堂を移し既にして建設されこれが入佛式を本多管長猊下を屈請して行ふ筈であつたが、管長猊下は震災後特に頗る多忙であるため關係者同友監督布教師の關西巡歷の途上之を請ひ、十月廿一日入佛假供養會を修行した、京都より藤原貞正を始め各方面の名士參列し當日は晴夜共堂の内外に參詣者溢れて頗る盛會であつた。

名古屋日蓮主義講演會

名古屋市の日蓮主義講演會は常德寺が大本營となつてその都度大盛觀を見たが、常德寺移轉後は前その根據地を失つた感があつたが十一月例會を仝月廿二日午後六時より名古屋市中區八百屋町妙行寺に開催し、本多日生猊下の「信仰の發生と内容、効果」の講演があつた、來會者忍ち堂に溢れ入場し得た者九百餘多數の人々が會場狹隘の爲飯つた、この盛觀に鑑み主催者を始めこの運動參加者は頗る力を得更に大發展をするべく着々實行に入つてゐる。

編輯局より

◆帝都の大震災の災厄は本誌印刷所をも見舞ふて折柄九月號の製本が出來てゐたのを忍ち紅蓮の災に包まれてしまつたことは讀者諸賢のよく御承知であつたらうと思ふ。

素より正法流布に進てを捧げてゐる吾人はこの際一層吾人の使命を強く意識して直に印刷所を名古屋に移し讀者諸賢に報いたことは密かに吾人の嬉びとしてゐるところである。

◆本號に掲載した本多日生猊下の「工場教化に就いて」は災厄に遇つた九月特別號のうちに在つたのを再び原稿を得て本號を發行することにした、又從來本誌に連載してあつた連續記事は新年號から續稿を掲げます。

◆本誌は從來購讀料一部定價三十錢であつたのを大正十三年一月號より十錢値下して二十錢にしました。これは一人でも廣く多く本誌を流布せしめたい意味と、讀者諸賢が夫れ〳〵知己に頒ち勸めたいから値下をして呉れとの希望に伴ふたからである。

讀者諸賢も吾人と主義を同じくし、共に同じ求道に精進してゐる同志である。本誌を出來得る限り多くの人々に勸めて頂きたい。編輯子の偏に希ふ處である。（城山の人）

廣告

謝震火災御見舞

今回の大震火災に際し弊店も類燒の厄に遭ひ候處早々御見舞を忝うし難有奉鳴謝候佛天の御加護を蒙り一同無事避難致し候間乍他事御放慮願上候

就ては整理に力を竭し漸く左記に於て營業開始致居候間何卒倍舊御引立の程偏に願上候　敬具

大正十二年十月　日

東京市赤坂區一ッ木町八十六番地
日蓮宗法衣專門　柏屋　中山喜太郎
（振替東京二三〇九九番　電車）登川稲荷前

社告

年賀廣告を取扱ひます

例年の如く本誌上の年賀廣告を取扱ひます

本年は年賀郵便特別取扱中止の折柄特に本廣告御利用をお薦めいたします

申込期日　十二月廿貳日限り

申込所　本誌編輯局

廣告料金　普通一人　金三十錢（特別御希望に依る）

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可
大正十二年十二月一日發行（毎月一回）

本多日生猊下著書一覽

○法華經の心髓　金壹圓六拾錢
○日蓮主義初步　金七拾錢
○日蓮主義　金壹圓五拾錢
○修養と日蓮主義　金壹圓五拾錢（品切れ）
○國民道德と日蓮主義　金壹圓五拾錢
○日蓮聖人正傳　金貳圓貳拾錢
○日蓮主義綱要　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮聖人の感激　金貳圓貳拾錢（品切れ）
○日蓮主義の運用　金貳圓五拾錢
○東洋文明の權威　金貳圓貳拾錢
○國民教化　金貳圓貳拾錢
○法幢　金貳圓貳拾錢
○戰士の伴侶　金貳圓貳拾錢
○思想問題の歸結と法華經　金貳圓
各卷壹部金貳圓貳拾錢
○聖訓要義　上卷一部金貳圓八拾錢
○開目抄詳解　金貳圓八拾錢
○聖語錄　金八拾五錢
○優婆塞戒經通解　金八拾五錢
○大乘本生心地觀經通解　金八拾五錢
以上各送料一部金八錢
○法華經講義　上卷下卷各一部金參圓四十錢　送料一部金十八錢
○大藏經要義　一部金參圓八十錢十一卷之既刊送料一部金拾八錢半年前金送料不要　製本金參拾錢　上製金五拾錢送料一部金貳錢
○法華經要文　金壹圓參拾錢郵稅六錢
○佛教信仰の正統
以上講讀希望の方は左記へ申込まるべし
東京市外品川町妙國寺內
大藏經要義刊行會
振替東京三一五九六番

統一定價

一冊	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

廣告料

一頁	金拾圓
半頁	金六圓
四分ノ一頁	金參圓半

前金の事

大正十二年拾一月二十七日印刷納本
大正十二年十二月一日發行（第三百四十五號）

不許複製

編輯兼發行人　國友日斌
印刷人　鈴木日雄
印刷所　名古屋市東區千種町字五反田廿五番地　益二社
東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地
發行所　統一發行所　振替東京五一〇七一番
編輯所　名古屋市東區田代町字城山七十七番地　統一編輯局
電話長名古屋東五四八七番